

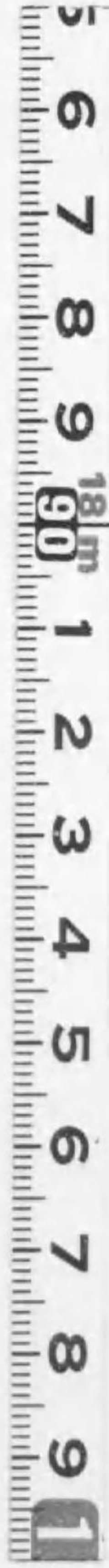
特116

214

東海亭金龍講演
 三木花夫速記
 俠客
 歡喜
 天安太郎

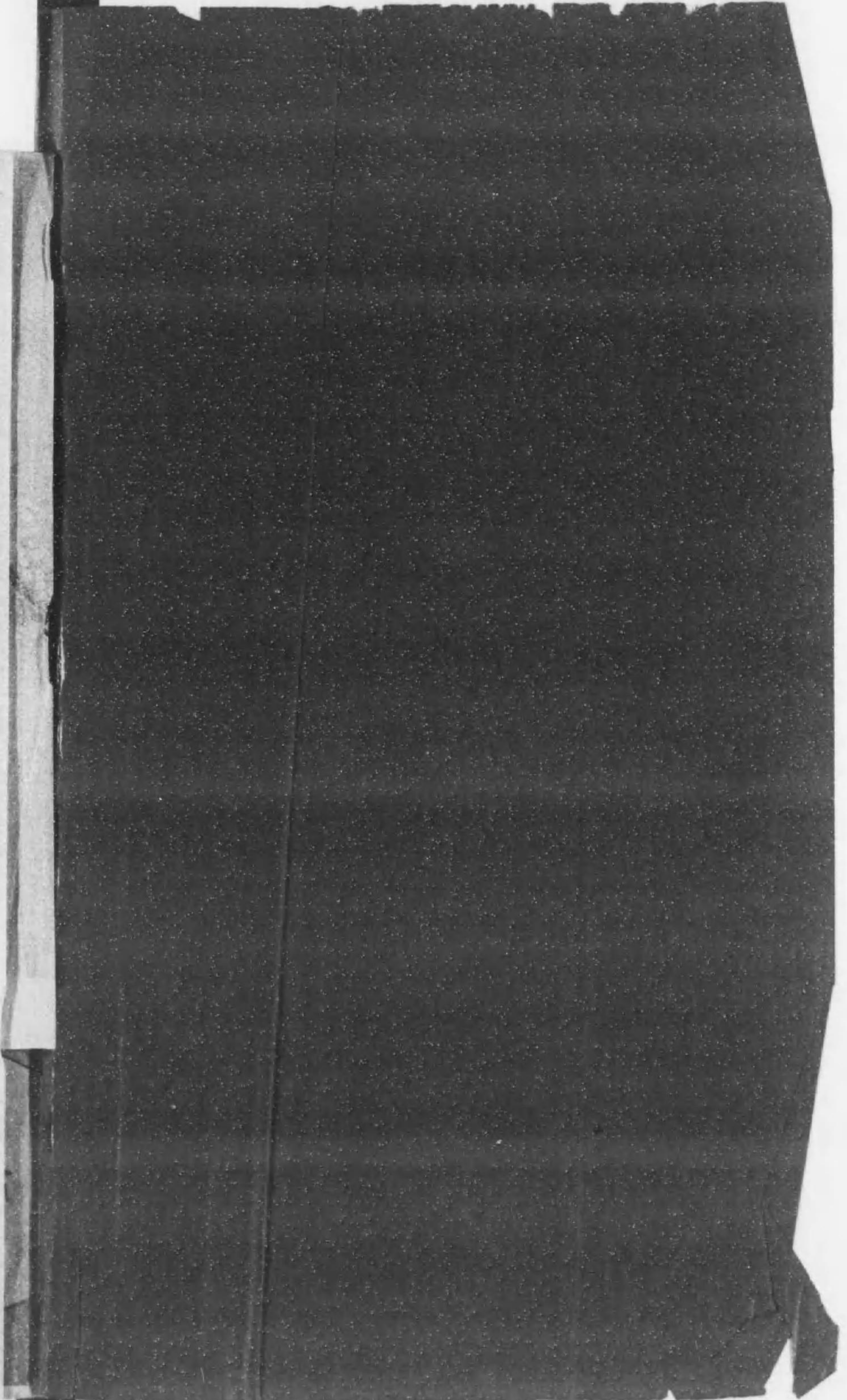
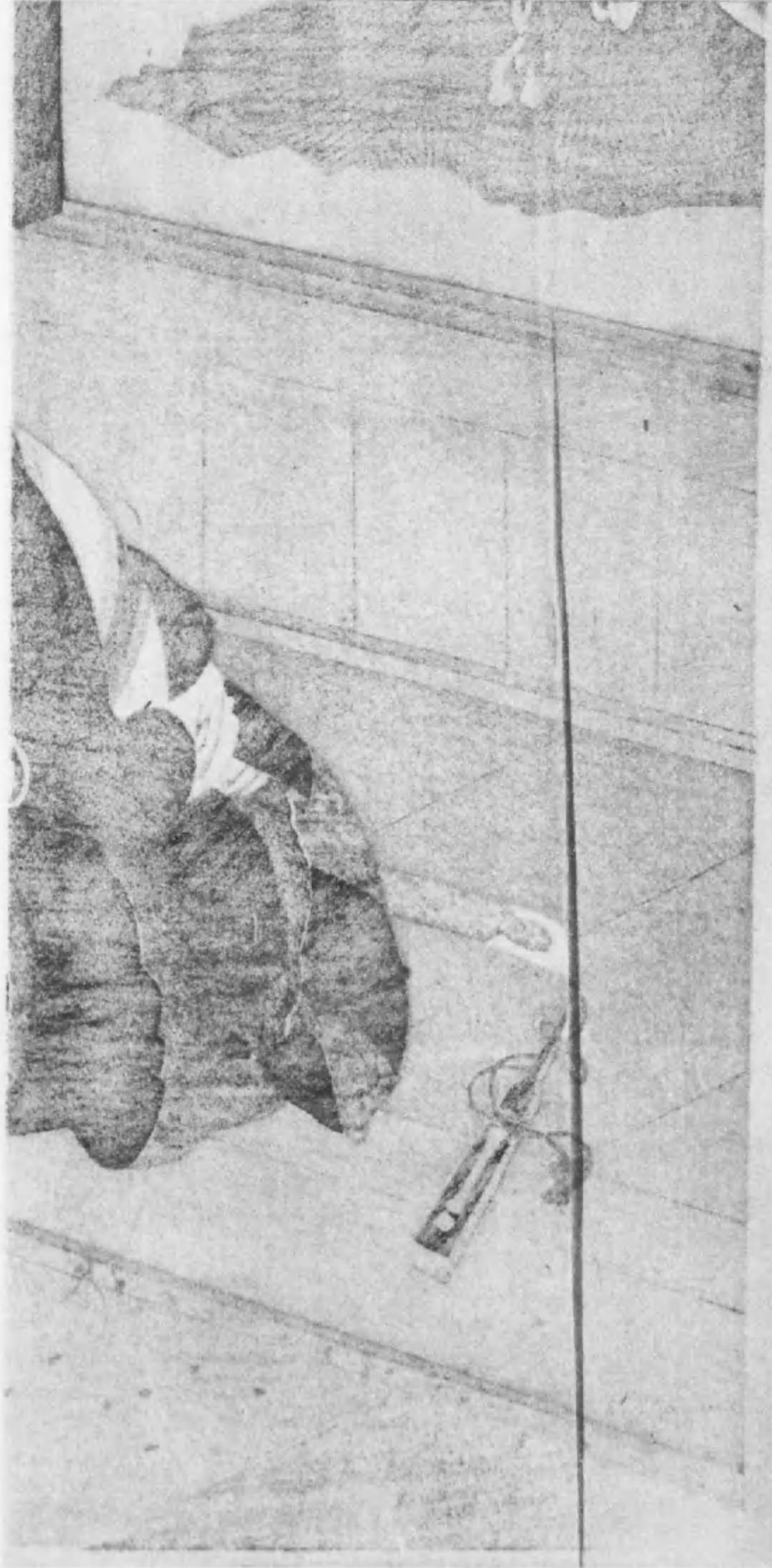
大阪

樋口隆文館藏版



始







5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

特116
214

歡喜天の安太

歡喜天の安太郎

東海亭金龍口演
三木花夫速記

大正
2. 3. 18
内交



第一席

エー本日より愛讀諸君の方の御機嫌に供しますは、既に先年樋口隆文館より發行になりましたる「侠客伊丹の奥之助」の續編にございまして、第二編は「女侠伊達のお峰」と題して發行を致しました、倍々お話しでございませうが、歡喜天の安太郎と申しまして至極面白、御愛讀有らん事を版元樋口の主人になり代りお願席をお樂みに御愛讀有らん事を版元樋口の主人になり代り



郎太安の天喜歡

お頼み申して置きます、借て其の前編は何の邊まで、お預かりに致しましたかと申しますと、彼の相撲取り小柳平助が兩國橋の上に於きまして、義弟相撲の殿峰五郎と不動山岩造の兩人のため、無惨の最後を遂げました、小柳の葬式を出して百ヶ日に當る日、芝濱の與之助の宅へ一通の手紙が舞ひ込んで参りました、何に者より出したる者か分からねど、宛て名は與之助でありすから、披げて見ると驚ろく可き文面、己れ憎さも憎し紫組の奴輩、今に見て居れ何うするか、實に切喙扼腕の様にございます、早速此の文面を政五郎にも亦お峰にも話をして致しまして四月八日の夜になりまして、政五郎の奥座敷に集まりました、與之助をはじめと致し、緋絨の吉藏、常盤の松五郎、武藏野金太、新橋の留吉、此は政五郎の四天王でございます、此處等の者が集まりまして色々と協議を致して居りました、政五じやア與之助、お前は一人で行く心算かい與之へい、阿

郎太安の天喜歡

父さん、俺しは一人て岩造を受取に参ります心算でございます、政五、フン、だが與之助、敵は旗本の紫組だよ、まして處も百本杭、大丈夫かい與之ハ、ハ、ハ、紫組でも旗本でも、時と場合によりや、糞とも思はん此の與之助でございますから、御心配の無エ様に願ひます政五、けれども敵は大勢、お前は一人……、何んなら十人ばかり連れて行つたらどうじや與之、其れでは與之助男が立ちません、手紙には一人て來て呉れどあるから、一人て行かなさきやなりません、何うか今夜の事は俺に任してお呉んなさい」と、一度期う云ひ出したら後へは引かぬ與之助の氣性ですから、緋絨の吉藏が「親分、若親分が彼の様に云つて居られるのでげすから、お任せになつつちや何うでございます」と云ひ出した政五、其れじや、與之助、お前が一人で行く事に決しよう」と、茲に協議が確定まして、いよいよ其の夜の真夜中頃と相成りました、なにしろ與之助は以前が武士でござい

ますから、大勢を敵手に戦はねばならぬと云ふのは、常日から用意が致して有つた、真綿ばかりの襦袢、是れを小半時ほど水に漬けて置きまして、一絞致して是れを着て置きます、是れは武士が真劍の勝負に出る時の嗜みでございまして、斯うして置きますと、野の仇討の際には是れを用いたさうでございまして、大勢敵の手賀の上野の美しい着物をはなす時、一ツ違へば、大勢敵は斬り結ぶのだから、着物はなる丈身に致しまして、太刀は自分殿から修業を致して居ります、粗末な朱鞘でこそあれ、左衛門殿から貰ひ受けました、作りは師匠神流の名人山田彌中身は備前兼定抜けば玉散三尺の剛刀、其れをば斯う落し差しに致しまして、芝濱の一人、大膽と云はうか不敵と申しますと、大敵を前に

た、後方に残つた政五郎を始め四天王の者は、心配でなりませぬ、何んの此の儘では捨て居かれませうや政五「ナア皆の者、彼あして與之助は一人で行たが、逆も一人じや行くめえ……金本、何んしろ向うは紫組でげすからな……松五「ナニ、若親分の腕前だつたら、平棒旗本が二十や三十來たつて、頓着の有者ですか政五「ケレドモ己は心配でならないから、免に角、野郎共を皆呼び集めて其の準備を仕て呉れ吉藏で、親分何う致しますので……政五「ウン、云はづと知れてら、百本杭まで出張、時と場合で、此の政五郎も乗り出して、紫組とやら青組とやら、頭分、石黒の粗首引コ抜く心算さ皆々「ヤツ、其いつは有難いッ」と、皆々打ち喜び、何んしろ喧嘩と云つた日にや、三度の食事よりもと云ふ連中、早速と子分を呼びあつめ「ソレツ、細の用意もしろ、提灯は不用ねッ」と、各々準備を致しまして、親分政五郎の前にツツと居列んだ、六十人の子分、各人思ひく、得

物を携へて居ります、政五郎は皆の者に向ひ政五「イ、カイ皆の
 奴、此宅をでる時にや一同に出ると人に悟られるから、散々ば
 らくになつて百本杭まで急いで行くのだぞ、分つたか皆々「へ
 イ、政五「其れから集まる場所、宜いかい皆々「へ
 政五「其れから、必ず此の政五郎が合圖をするまでは出る事
 ならんぞ、若し己が出よつと云つた時にや、宜いか、緋緘の吉
 藏と、新橋の留吉とは、野郎六十人の中二十人を連れて、不
 山岩造を引渡へるんだぞ、武蔵野金太と常盤の松五郎は、残
 四十人で己と共に紫組の野郎を殺すのだぞ、必づ合圖をする迄
 は何んな事があつても出るじやネエぞ、宜敷か、譯が分つた
 ら徐々に出掛けやう、〇「へイ、分りました、宜く分か
 つて居ります、〇「へ、〇「へ、〇「へ、〇「へ、〇「へ、〇「へ、
 い變てこな笑ひ様をするなア……、〇「嬉しいから喜んで居るん
 じや無えかい、〇「何んば嬉しいからつて、そんな各な笑ひ様を

する事は何うでもいや、眞實に昨夜の夢見が好かつたよ、〇「其んな
 事件は何うでもいや、早やく出掛けやう、〇「オツと合点」と
 是れより六十余人が或は表から又は裏から、何づれも百本杭
 の松原へと與之助の先廻りを致しました、借て此方は芝濱の與
 之助、我家を出ましてドシ、と百本杭へと急いでまゐりま
 した、夜は淋々として、木萱も寝る丑滿の時、漸々と百本杭へ
 與之助は只一人出て参りました、何うやら向方の物影に集ま
 り居るのは紫組の奴等らしい、與之助は、怖氣もしないでメン
 〇「と進んでまゐりました、眠と透して見ると、何うやら石黒
 軍次兵衛らしい、與之助「ヨウ、之れは石黒の旦那……、軍次「オ、汝は
 芝濱の……、與之助「へ、へ、與之助の野郎でございます、早速とお
 約束の不動山岩造を貰ひに参りました、軍次「ウン、好く参つた、
 如何にも岩造は手渡致そう、併し、オ、其れじや渡されないが、
 其れが承知か……、與之助「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
 人の寝静る眞夜中頃に、場

郎太安の天喜歡

所も有らうに往來の人も、絶て淋しい百本杭で、渡さうと云はれりや此の胸に、白刀の山や劍の林へへ、ッ覺悟はちやんと胸三寸……軍次「ナ、ナンと、覺悟と有らば……」與之「何つ何時など」それッ軍次兵衛が目配せを致しますると、何づれも禪十字に綾取つた、袴の股立ち高く取り上げ、大行な扮装の武士が四五十名、バラ／＼と、真中に不動山岩造を取捲で現はれました、中にも彼の阪上に高田は、新富座にて第一番に投げ附けられた奴、大勢を頼みにバラ／＼ッ其場へ進み出で阪上オ、珍らしや芝濱の與之助ッ、不動山岩造が愆しくば先づ劍の御馳走から……」と、第一番にオラリと抜き放つた、一足後方へ退をいて與之助は大口開て「ハ、ハ、ハ、ッ何んの事だ、丁度大きな仇仕なくちやア討て無エのか、情け無エ、紫組でも無エもんだ、ハ、ハ、ハ、ッ軍次「何んだと、云はして置けば悪口雜言、今に首

郎太安の天喜歡

と胸とを斬り離して遣るから、念佛とな唱へ居ろッ與之「俺の首筋にやア、南蠻鐵の筋鉄が這入つて居りますから、其んな鈍刀では一寸斬れ悪うございますよ軍次「何にを生意氣なッ、其れ各々、最早や是れまで、與之助を討ち取りめされ」ハッとはかりに、後方に控へた幾多の武士、一時に抜き連れ、與之助の目掛けで斬り込んで参りました、今は與之助も猶豫ならずと、一間計りも飛退ぞくと同時に、腰に佩さむ備前兼定三尺の剛刀、抜くより早やくッと身構へた神蔭流、サア抜かぬ中は兎も角も、抜いたと来た時は、日頃から與之助の腕前の程を知つて居る紫組の腰拔連中、誰一人と致して近寄る者はございません斯くては果てじと石黒軍次兵衛石黒「ヤア、方々、一文奴一人位ひを討ち取るに、何にとて猶豫めさるゝぞ、早やハッ討ち取り召されッ」と、厳しき下知を致しました、其の下知に勵まされたる大勢、ドッと同が斬つて掛つた、心得たりと計りに與之助は、

大勢を合手に斬り合ひを始めました、が何にしろ敵手は大勢、始めのうちに右左りに、ハツタ、斬倒して居りましたが、次第に身も疲れてまゐる、此の儘に今一時も捨て置きますなれば、實に與之助の命は危険な者でございませぬ、然るに前刻の程より彼方に松蔭に息を殺して沈み、今や親分の合圖や遅しと相待ち居りましたる六十余人、今はだん／＼と與之助は受け太力最う猶豫は相成らぬと政五郎は「其れ野郎ッ、殺して了へッ……」と、宛がら肉血に望む悪鬼の如く、イヤ疾風の如く、ワッ、松蔭より六十余人、繩の禰に振鉢巻、何づれも獲物は々々を携へて、ドツと計りに乗り出した、此の場の結局は如何に相成りませうや一寸と一息致しまして次席に詳しく。

第二席

腕には多年練磨したる神蔭流、太刀は古今の業物、師匠より授かりたる備前兼定の三尺もある剛刀、三四人は前後の方に斬り倒したが、今與之助の周囲を、十重二十重と取り捲いたので、如何な與之助も、次第々々と受け太刀の、其れに附け込む紫組の連中、其れ此の機に討ち取つて了へど、何づれも激しく斬り込んで參る時、真先に走來たつた芝濱の政五郎、大聲をアツと驚く其の中に、真先に走來たつた芝濱の政五郎、大聲を張り上げて、政五ヤイ、與之助ッ、氣を健かに持て、政五郎が子を分る野郎を引き連れて、今助太刀に來たぞッ、不動山の野郎は氣に掛けず戦へよッ……」通常前の者なれば、此れ丈大勢を前後左右に控へたならば、却々政五郎の云ふ事は耳に這入りさうな事はございませぬ、唯々耳がチャン／＼と鳴る計りですが、其處は武術の極意を極めたる與之助、如何に受太刀にならうとも、氣は落ち着いた者でございませぬ、

ものを見へまして、與之「ヤツ、來て下すつたか、併し、奴等には
 疵は附けても、息の根は止めない様に願ひますぞ」と、與之は
 助も今は氣が丈夫になつた、一方は、兼て手筈が致して有る事
 とて、同勢は打ち向かひました、一助の助勢、一方は不動
 山岩造にと打ち向かひました、大體與之の助一人でも、モテ
 致して居る紫組、其れに芝濱の政五郎が大勢の子分を連れて來
 た、云ふので、臆病な奴は早や逃げ腰でございます、中にも不
 動山岩造、コハ叶はざると、大きな身軀をユカ／＼と振り乍ら、
 一生懸命にと逃げ出した、其れと見て取つた芝濱組「其れ不動
 山を逃がすナツ」と、緋緘の吉藏と新橋の留吉は、二十人を碎
 連まして、逃げ出さんと、此方の政五郎は今も取つて押へ、高
 小手に縛めを附けた、此方政五郎は早くも取つて斬り込
 んで居る旗本連中の背後から、政五郎は計りに打ち込みましたの
 で、一時に八九人の怪我が出た、コハ叶はざると、石黒軍次兵

衛を始め紫組の運中、友が倒れて居ても其んな事にはお構ひな
 く、三十六計、トシ／＼お聲に帆を上げ、後と白浪と逃げ出し
 た、實に笑止千萬な話でございます、與之の助も太刀を其處へ投
 げ出して、ホツと一息致す處へ、政五郎が近寄り來かり、政五何
 うじや與之助、何所も疲は受けなかつたかい、與之「ハイ、有難う
 疵はありまんが、俺も大勢とは覺悟で來ましたが、彼れ程も大
 勢とは思ひませなんだ、已でこの事で殺れる處でございました、
 併し不動山は逃げましたか……政五「ナイ、不動山が動く者か
 い、チャンと此方で繩に掛つて坐つてござるワイ、ハ、ハ、ハ、
 して後の始末は……與之「奉行所へ出る迄の事、政五「其れじや、自
 訴は明日の事、此の場は金太と松五郎に片附けさせて、早や
 引き上げの事にしやう、與之「其れが宜しいナ」と、武藏野金太と
 常盤の松五郎に十人ばかりの分を残り、倒れて居る奴は何處
 へも道ひ出さぬ様に番を致す事になり、倒れて居る奴は何處

うした、考へても残念でなりませんが、其處で、咄嗟の考へ、芝演の留

て、今の紫組が来たかど、内部ではお峰さんがお琴を弾き出し

店の間から中の間、奥の間までも、百目蠟燭を点々と灯を上げて

で、表の戸をガラリと開けさせ、門口には高張提灯を高く上げ

が、早速と、留守番に殘されたる十人移の子分を呼び集めました

んだよ、其れは斯うくと、親娘が何んだか話合て居りました

うも仕様が有りませぬわお峰、イヤ、阿母さん、好い計略がある

等が、留守中に來たら面倒だはネ……お瀧、其れはそうだが、何

も與之助さん、百本杭まで出て行かれたが、万一も旗本の奴

娘が差向ひお峰、ネー阿母さんお瀧、ナンじやい……お峰阿父さん

伊達の蜂、與之助も政五郎も出て行つた後で、火鉢の中に親

芝演の宅に於ましては、政五郎の女房お瀧と、娘與之助の女房

に與之助、皆の者を連れて我宅へ歸る事となりました、然るに

守宅へ亂入せんと、一同相談の上、芝演の留守宅へ

押寄せ参りました、其れにしては、高張提灯を上げて

表の戸はガラリと開てある、斯ハ不思議、最早百本杭から引き

上げて來たのか知らん、其れにしては、内部の様子を窺ひに遣り

しても不思議な事と、一人に命じて、内部の様な事を誰か

ますると、暫時して立ち歸り來たり、○何んだか知れませんが

内部には蠟燭を澤山に点じ、離れ座敷の方では安閑と、誰かが

琴を弾じて居ります様でございます、石黒「フーン」と、腕拱て

考へながら、眠つと耳を澄まして聞て居ると如何にも、種々相談を致

テ合点が有る事と、折り柄と、暴れ込みも得致さず、種々相談を致

して居ります、折柄と、暴れ込みも得致さず、種々相談を致

來た、見附けられたは大變と、紫組が留守中を暴しに逃げだした、早や

勝も眺めた、奥之助、ソレ紫組が留守中を暴しに逃げだした、早や

勝も眺めた、奥之助、ソレ紫組が留守中を暴しに逃げだした、早や

祝酒を頂戴する、左右する中に東の空が白み出、夜がホノノと明て参りました、其處で早速と與之助は誰一人、先日旗本紫組より寄越しました、其の奉行手紙を懐中なし、細附の不動山岩造を引つ立てまして、時の奉行太田河内守のお屋敷へ自訴を致しました、た、早速の事にお呼び出しになつたお白洲、不動山も共に出る扱て河内守様は與之助に對はれ奉行ア、百本杭に於ひて昨夜旗本の紫組なる者と決闘を致したは其の方か與之「ハイ奉行其方は與之助と申す者じやナ與之「御意にございませす、芝濱の與之助とは私のことございませす奉行フン、して、其の決闘の原因は何う云ふ處から起つたのじや、明白に申し立てよッ與之「ハイ實は斯う云ふ譯でございませす……」と、彼の新富座の一件から、小柳の横死、百日目の手紙が参りし事迄を、落ちもなく物語りました、残らずお聞き取りになつた太田河内守、「フム、すりや何にか、其の方は不動山岩造を受取に参つたのじやな……」

與之「左

様でございませす奉行シテ其方は旗本連中に、何にか恨みでもあるのか……與之「イエ、却々持まして恨みと申すやうな事は尠しもございませせん……奉行「コリヤ與之助ッ、此處は奉行所であるぞッ、白痴た事を申すナ、恨の無き旗本を何故斬つたッ與之「ハッッ、恐れ入ましてございませす、其れは不動山岩造を受取りまする際に、邪魔を致しましたゆえ……奉行「其れで申し譯が立つと思ふかッ與之「ハイ恨の無き證據には、何者にも疵こそ附けてございませすが、絶命は刺てございませせん、何卒、此處の道理を宜ろしく御推察を願ひませす」と、申し立てますると、昵つとお聞に相成たる太田河内守奉行ム、ハッ、與之助ッ、能く申した、申譯相立たぞ……與之「ハ、ハッ、有難うございませす奉行「コリヤッ、力士不動山岩造面を上げよッ……不動「ハイ奉行其方が過日、兩國の橋上に於て、小柳平助を、殿峰五郎と共に討ち殺したに相違ないかッ、明白に申し立てよッ不動「ハイ、恐れ入り

ましてございませぬ、其れに違ひございませぬ、併し私しは兄の
 仇討を致しましたのでございませぬ、奉行すりや何にか、其方の兄
 が小柳のたれに討たれたと申すのか、何うして討たれた、場所
 は何處ぞ、兄は何にを營み居る者じや、申して見よ、不動「ハイ、
 實は私しの兄と申しますのも矢張力士でございまして、小柳の
 ために士儀で投げ殺されました……奉行「コリヤッ白痴奴ッ、士
 儀の上なれば詮方無き事ぢや無いか、併し兄の仇討と申し立て
 た廉を以て、幾分か罪は軽く致して遣ぞ、不動「ハイ、有難うござ
 います、奉行「シテ、未其方に訊ねる事がある、殿峰五郎は何處に
 居るぞ、知り居るなれば明白に申し立てよ、隠し立てを致すと
 ために宜くないぞ、不動「ハイ、全く存じませぬのでございませぬ
 奉行「フム、存んせぬと申すのかッ、宜しッ、其れでは兩人とも
 揚屋へ投り込んで置けッ」と、下役人に申しました、何に故罪
 もなき與之助を揚屋へ投込めと申しましたかと申しますと、之

れは一ツの計略でございまして、與之助を峰五郎が出て來ぬば
 つかりて揚屋へ投り込んだら云ふので芝濱組の者が一生懸命に
 相成て殿を探索出すであらう、と斯う申ししたのでございませぬ、
 傍に控ましたる下役人、ハッと答へて立ち上り、兩人を引立て
 んど致します折りから役人「ハ、ハ、ハ、只今、一人の田舎武士が
 殿峰五郎と申す者に繩打て、連れまゐりましてございませぬ、此
 の儀如何に取りはからひませうか、奉行「何んと申す、殿峰五郎に
 繩打つて訴へ出たと申すか、其りや宜き處へ来た、早速と兩人
 共之れへ通せ、役人「ハ、ハ、ハ、と、立ち上がり、暫時致しますると
 其處へ出て参りましたは、未だ年齢若き、田舎武士なれど、筋
 骨遣ましく、何處どはなしに、身体が固まつて居ります、其の
 年齢若き武士が繩尻を取り、後ろ手に縛られたまゝ、駕籠夫に
 負はれて、何うやら足が一本ないらしい、峰五郎は坐る事も出來ま
 ざいます、漸と御白洲へ出でまして、

せんから、其處へ轉がしまして、駕籠屋は其處を立ち去りました、其の傍らに着座を致しました彼の武士、ヒヨイと、横手に居る與之助と、互ひに見合はす顔面、武士、オ、ツ、貴方は兄上で、はございませんが……與之、オ、其方は弟の安太郎……、死んだと思ひし安太郎か、無事で居て呉れたか、して其方は白洲へ何う致して参られたと、問はれて安太郎は、兩眼に涙を浮べ、如何なる事を談り出させうや、段々と本講談も佳境に入つて参ります、不思議なお話は次席に詳しく……。

第三席

エーお話しは一變致しまして、ツツと初編に戻りまするが、此處に、獨川豊能郡の伊丹の在竹島村と申します小程氣な村に、百姓

峰作と申します極て正直な爺さんがございました、老年取た夫の中は何んの因果でございませう、家に寶ども申します子供が一人もございませぬ、爺さん婆さんは、到底自分等の力では、此の老体で子供の出來そな事が無いと、朝夕に生駒の歡喜天へお願ひ申し、何卒ぞ私等夫婦の者へ一人の子供を授給へと一心に願を掛けて居りました、或日の事、峰作が畑へ出まして、畑の仕事を致して居りましたが、七ツ時分(當今の午後二時)未の刻でございませぬ、峰作爺さん先づ一吹と、樹の根に腰を下ろしまして、カチンと火燈から火を取りまして、スバリと煙草を燻して居りましたが、暫時致しますと、何んだか斯う寝轉びました、ウツと致すと、誰れか、荐に枕に寝轉びました、ウツと致すと、誰れか、荐に斯う揺起しますから、偶と目を覺ましますると、白髪の老人、上から下まで眞白でございませぬ老人、コリヤ峰作、其方は日頃より

子供が欲しいと申し出て居たが、汝の望みに任せて、今夜、亥の刻に子供をお前の家まで連れ行くに依り、必ず粗末に致すで無いぞよ、我れは生駒歡喜天より使者の者じや、夢々疑う勿れ……」

と、云ひ終ると同時にバツと紫雲棚引渡り、忽ち峰作、四邊をキヨ如くに無くなりまして、フト目を覺しました。峰作、夢を見た、夢は五臓の病ひとは云ふが、今のは屹度歡喜天様の夢のお告に違ひない……」

ぞ、有難い……と打ち喜びまして、其の日の夕方、畑の仕事を仕舞まして、急いで自分の宅へ歸つて参りました、表の方から大聲を上げ、峰作「ヤア婆アどんや、喜ばんせよ、毎夕に歡喜天様をお祈り致す甲斐あつて、今晚の亥の刻に、子供を下さるのぢや、喜ばんせ、ア、有難や、婆、コレ、實は爺さん、其んな事が何故お前さん分るのぢやい峰作「フン、實は婆アさん、斯うだ、今日畑で仕事を致して居ると斯うく……」

話を致して老たる夫婦は喜んで居りました、倍て夕飯も終りまして、其の夜の亥の刻(今の午後の十時)夜はシンと致しまして、何んとなく物淋しい、峰作夫婦は寝も遣らず、種々と談り合せて居ます、折りしも表の戸へ、何んだか大きな石でも當つた様に、ドシン——と異様な音が致しました、峰作夫婦は打ち驚いた、峰作「オヤッ、何んだい吃驚した、オイ婆さん一寸見て来たよ、婆何んぢやい爺さん、女に見に遣る事があるかいナ、お男が見て来て、女に安心さして呉れるのが當前ぢやないか……」

峰作「ハ、ハ、ッ、婆さん若い時の様な事を云つて居るな……、イヤヨシ、爺が一ッ見て来よ」と、峰作が起ち上がつて、表の戸を開けて見ますと、何んだか眞ッ暗で少しも様子が分りません、峰作「婆さんや、一寸火を持って来なよ、蠟燭に火を付けて、早やりました、婆「ナンぢやい今のは爺さん……」

峰作「何んぢやろ……」

と、云ひながら、斯う火を出して見ると、其の前に可愛らしい
 四つ歳位の子が倒れて居ります。峰作「オ、之れは……」
 と、思はず抱上げた、其の途端に手にせる火が消へて四邊は眞
 の闇、其の闇を破つてカラ／＼と笑ふ者があります。ヒヨイと見
 ますると、峰作は驚いた、今日畑の夢で見た、彼の白髪の老人
 が朦朧と立つて居る老人「峰作夫婦、大切に育てよ……」と、云
 ひ残して消へて了ひました、峰作夫婦の喜悅は如何ばかりで
 ざいませう。峰作「儲ては歡喜天様の授けであつたか、有難い」
 と、打ち喜び、早々内へ連れ這入りました、其れ水を飲して遣
 れ、氣附け薬である、色々と介抱を致して居りました、ここ
 ろが峰作がヒヨイと其の顔を見て二度吃驚、峰作「ヤ、ッ、婆さん
 此りやお前、此の伊丹で名高の百姓の、其れ、茂左衛門さん
 の……」
 婆「エ、ッ、何にがだい……」と、
 峰作「ケド婆さん、能く考へ

て見な、變じやないかい、三日前の晩に茂左衛門さんのお宅は
 毒婦お濱の奴が火を附けて逃げたぢやないか、其の時安太郎さ
 まは……其れ、焼け死なれたと云ふて、骨まで出たぢやないか
 …… 婆「ホンニそうじやナ、爺さん不思議なこと世には有る
 者じやナ……」と、不審を打つも道理（詳しきは初編俠客伊丹の
 與之助を讀まれん事を乞ふ）一度焼け死んだと噂の立つた安太郎
 が、ヒヨッこりと、百姓峰作の宅へ舞込んだのですから、驚く
 のも無理はございません、偕て之れは如何なる譯かと申します
 と、是ればかりは、如何な千里眼でも万里眼でも、いや御叮嚀
 乍ら億里眼でも知りさうな筈はございません、知つて居ります
 のは、天下は廣しと申しまして、世界で金龍一人しきや存ん
 じて居る者は有りません、其うすると金龍も偉い者ですな、千
 里眼の上を越えます、ですから千鶴子さんを女房にと思ひまし
 たが、死去なられたので仕方がありません、イヤ飛んだ事を申

しまして恐れ入ります、問話休憩まして、彼の安太郎が如何致して救かりましたかと申しますと、其れは斯うでございます、性來茂左衛門と云ふ人は、非常に歡喜天信者と云ふ事は愛讀諸君にも御存知の筈でございます、其處で安太郎は毒婦お濱の腹に、出産た子ではございませうが、それ運は泥中に有りと雖ども其の花は清く、歡喜天様は、安太郎は眞人間であると云ふ事を知られ、彼の毒婦お濱は、お濱の情夫山田團平、其れから奥田喜平次と茂左衛門の留守中に、有金を取渡へて、剩さへ家に火を付けて逃げ出す前に、安太郎を救ひ出されたのでございませ、初編には其の際に、安太郎を斬り殺した様に有りますが彼れは眞實は、歡喜天様のお計らひで、猫と替へて有つたのでございませ、之れも日頃からお計らひで、朝夕に歡喜天様を信仰致しましたお蔭でございませ、其の日から三日日に、百姓の峰作の家へお授になつたのでございませ、

らぬ峰作夫婦の驚くのは道理でございませ、峰作實に之れは不思議じや、けご婆さん、何う云ふ譯で救かつたのであらうな……ハ、ン、分かつたワイ、婆さん、分つたかい、峰作分らいで、婆さん宜く聞きナ、大体茂左衛門の旦那は、俺と一同で、大變に歡喜天様信仰じやろが、そじやから、其れ歡喜天様の御靈驗でお助かりなすつたのぢや有るまいか……、婆、ン其うじやナ爺さん、そりや左様かも知れませんせ……、其れよりは、早やう之の安太郎様の氣絶してござるのを……」と、なほもいろくど手當を致して居りましたが、其の甲斐あつて、漸々の事で正氣附きました、安太郎はキヨロくと四邊を見廻して居りますから、峰作「イヤ安太郎様、お氣が附きましたか……、可愛坊様を投て置いて、遠い、遠い所へ行かれましたワイ、ですから、今からは此の峰作爺と婆とが、貴方の親でございませ……」と

申します、喜天の安太郎、別に泣きも致さず、斯う肯いて居る、後には歡
 ます、漸々五歳の安太郎でございませうが、今峰作が云つた言葉
 が分つたものと見えまして、安太、左様か、其れぢや、阿父さ
 ん、阿母あさん寝ね……」と、早や親子氣取てあまへて居る、阿父さ
 ん、峰作夫婦の喜びは如何ばかりでございませうや、實に例るに
 もの無き有様でございませう、偕て其の翌日から、安太郎に
 どの可愛がる、安太郎も、阿父さん、阿母あさんと從う、世間の人
 は之を聞いて、安太郎さんは歡喜天のお守子だと云ふので、安
 太郎のことも聞いて、誰れ云ふとはなしに、歡喜天の安太郎と呼ぶやう
 に相成りました、ボンと叩きますると五歳の安太郎が、早やい者
 で七年経過しまして十二歳になりました、此の竹島村の氏神さまは、
 騒動が出来ました、申しますは、此の竹島村の氏神さまは、
 毎年九月十二日が秋祭でございませう、斯様な田舎でも秋祭にな

ります、境内には、からくりだとか、朝からドシ〜と參詣を致します、
 活動寫真に屋上公園、豈夫其の時代にはルナパークや活動寫
 眞作なものはございませぬ、今年、中々賑かなこととございませ
 峰作夫婦も、最早取る年、今年、参詣が終り、安太郎
 郎宅の番をさせまして、村はづれの氏神へ參詣を致しました
 前に参詣も済ませまして、彼方此方と廻はり、今しも犬芝居の
 生でも教やう一ツで何うでもなるものぢやないかい、蓄
 、ッ、爺さん見な、假頭を被つて、熊谷の眞似ぢやナ、峰作
 の其様らしいナ……」と、二人が頻りに話合せて居りますと、其
 の横手に居た若者、何んだか先刻から峰作の懐中の容子を考へ
 て居りましたが、矢庭に峰作の懐中へ手を指し入れて、中の財
 布を引きだした、が、矢庭に峰作の懐中へ手を指し入れて、中の財
 布を引きだした、が、矢庭に峰作の懐中へ手を指し入れて、中の財

引掛けて居りましたものと見へ、グツと首つ玉が引つ張つた、
 峰作「コレ、お若衆、其の財布は私のでございます」と、云ふ
 のも聞かず若者「エイッ、姦ましいワイ」と、云ひ乍ら、グイ
 と引つ張つて行く、峰作は四五間も尾いて行つたが、之りや到
 底返しては呉れぬと思つたから、大聲を立て、峰作「ヤッ、泥棒
 だッ」と、叫んだ、之れを聞いた若者、バツと財布を持って居た
 手をはなして了ひ、グツと向き直り若者「オイ爺さん、誰が泥棒
 だえ、餘計なことを云ふものぢやねエせ 峰作「でも貴方が私の財
 布を引つ張つて行きなさるから、私は思はず聲を立てましたの
 ぢや」と、云ふと其の後方に居た婆さん、斯うなれば點つて
 は居りません「何んだ爺さん、腰が弱すぎるじや有りませ
 か、緊かりお遣りなさい……」 峰作「フン其様じや、ナア貴方、お
 前さんが私の財布を取つたから泥棒じやと云つたが、何にが不
 足でがすかい、エ、貴方、二人共年寄りやと思ふて余んまり馬

鹿に仕なさるな…… 若者「何にッ、余計な目を叩くナ、生意氣な
 事を吐かすと打ち殺すぞ 峰作「お前さん、そんな無茶なことがあ
 りますか、他人の物を奪りかけて奪られんからと云ふて、打ち
 殺すぞ、そんな無茶が何處の世間に有りませうかい……」と、乗
 り氣になつて峰作爺さん、財布さへ返して貰へば其れ止せば
 宜いに、斯う前へ寄つた、此の泥棒奴チト痴癪者と見へて、近
 寄り来た爺さんの横面を一つ、ものをも云はすヒシヤ……ッ
 撲つた峰作爺さん頬をおさへながら峰作「ア、痛い……、無茶な
 事を仕やがる泥棒じや、誰れ予來て下されッ」と、云つて
 叫び出した、若者も斯りや敵はぬと思つたか、峰作の胸の邊り
 を力に任して、ド、と突いた、ヒヨロ、として仰向け様に打
 つ倒れた、其處へ大勢が集まり來たりしましたから、泥棒先生も
 斯は敵はぬと、一目さんに逃げ出さんとする、どころへ門人ら
 しき者を二三人連れられた年齢三十二三の武士が、バラリと其處へ

飛んで出て、今逃げ出さんと致します若者の、首筋を引掴み
グツと引き倒した若者何卒ぞ御勘辨を願ひます武士イヤ成らぬ
相成ぬワイ、拙者は先程から様子を聞き居つた、汝は正敷拘徒
であらうが、イヤ其れなれば拙者が思ふ存分に致して遣はす
と、云つて居るところへ峰作と婆さんが来た峰作何うも御武士
様、有難うございませす武士オ、老人、何處も怪我が無いか峰作
ヘイ有難うございませす、別に何處も怪我が無いか峰作
います武士フ、其れは結構じや、して何にも奪られたものは
無いか峰作ヘイ、財布は最早返して貰ひました、其方に代つて、二度と
鹿に仕ますから……武士イヤ相分つた、其方に代つて、二度と
此處へは來ぬ様に致して遣るから安心致せ峰作有難うございま
す、婆お武士さま有難うございませす、と、禮を云つて居る、サ
ア見物の連中、ワイと云ひだした、斯うなると見せ物ごこ
ろじやございませせん、皆んな此の方へ集まり來たり ○「お武士様

何うか其んな野郎、骨酷目に逢はせて遣つて下され……」と、
ヤイと云つて居る、件の武士は、曲者を引き倒して其の上
に股がり、ニコと笑ひつゝ、武士何うじや、以後は改心致す
か曲者ヘイ、屹度以後は改心を致しますから何うか御勘辨を願
ひます武士イヤヨシ、其れでは見物の者に一度問ひ合はして見
よと、笑ひつゝ、武士イヤ見物の方々、此の曲者が以後は屹度
改心を致しますと云つて居るが、赦して遣りませうかナ……」
と云ふと、△「ナニお武家様、其の野郎の云ふ事は皆な嘘言で
ざいますから、一つ何處ぞに、以後の戒めに疵でも附けて
下さい……」武士イヤ道理じや、ヨシと、其れでは左様致す
と、小柄を抜き取りまして、右の耳を左の手で斯う引つ張り、
小柄でギシと切り出したから堪らない曲者ア、ツ、イ、イ、
痛へ、ド、何うか赦して下されませ」と、ハタと悶躁
出したが、其んな事には頓着なしに、到頭右の耳部を切り取つ

て了ひました、まだ其れでも臍に落ぬと見へ、武士「ア、葉田氏、
氣の毒ぢやが其處等の泥を少し持て来て下され葉田「ハ、ッ、先
生、何う遊ばすのでございます、武士「イヤ一寸と入用じや」と、
云ふから、三人の若武士は各々泥を一掴宛もつて其れへ参りま
した。

第四席

葉田「先生、是れで宜敷うございますか、武士「フムイヤ其れで結
構々々、サア曲者、切つた計りでは面白く無いから、一ツ血止
めの妙薬を附けて、かはずから、有難く頂戴致し居れ……」と
此んな無茶な先生に掛つた日には、棍徒でも騙子でも堪つた者じ
やございませぬ、耳部を切り取つて、メラ／＼と血が流れ出る
箇所へ、泥をグイ／＼と塗り附けた、纏てヒイ／＼と云つて居

る奴の首筋を引つ掴み、引き摺り起し、武士「サア、是れで容赦を
致す、以後は必ず改心を致せよ、汝の耳を見て笑ふ人有れば、
自分は何うして此の耳を切り奪られたか、と云ふ事を考へ出せ、
今日は見脱して取らすから、トット／＼と立ち去れよ」と、首
筋を放して遣りましますと、物をも云はづに一目散、鯨口を脱れ
し、綱のそれならで、後方白浪と逃げ出した、然るに誰れか此の
事を安太郎に知らしたも、見え、安太郎は一生懸命、程遠か
らぬ村外れの氏神指て駈け着けた、安太郎、阿父さん、阿母さん、
怪我はございませぬか、泥棒は何處へ行きました……」と、速
逸安太郎を峰作は押し止めて、蜂作「其れより、彼の御武家様に
お禮を申してお呉れ、泥棒は今斯う／＼致して逃がして遣つて
下さつた……」と、語るを聞いて安太郎は、早速と例の武士の
前に來たり安太之れは、お武士様、お禮を申して宜ろしいやも
うこそお助け下さいました、何んとお禮を申して宜ろしいやも

相分りませぬ、何うか陋苦しい家ではございませぬが、粗茶なり
 と……」と、云ふ口振は實に十二や十三の子供の云ふ事じやご
 ざいませぬ、武士ハ、ハ、ハ、ハ、イヤ、憫れそうな子供じや、其れでは
 我々が大きに困る、實は我々は大阪今橋二丁目に道場を開き居
 る者であつて、白澤權四郎と申す者、縁が有つたらまた逢はう
 峰作「コレ安太郎、お武家様はあの様に云ふてござるのじやから
 陋苦しい家へ強て連れ歸つては返つて御迷惑を掛る様な者じや
 ナア婆さんや、婆ア、左様く安太其れでは、後日大阪へでも
 參る様な事が有れば、また改ためて……白澤「イヤ其れには及ば
 の、併し老人は氣を附けぬといかん一同有難うございます」
 茲に別れて白澤權四郎は門人と語らひつゝ、道を急いで、此方は
 三人とも家へ歸り、其の日は何んなく暮れた、翌朝になりませぬ
 と、平素から余まり朝寝をしたことのない峰作爺さんが、今日
 に眼つて非常に遅ひので、安太郎が起しに參りますると峰作「今

日は何んだやか知らんが、昨日彼の泥棒に突飛された時に此の
 頭を打つたのか、強う頭痛がする様じや安太「其れは悪い事で、
 頭でも冷しませうか峰作「イヤ、左程でもない様じや」と云
 ふて居たのが何うやら急に其の日の正午頃から熱が非常に高く
 なつて来た、サア大變醫師よ薬よと云つて介抱を致しましたか
 何に分にも年が年でございますから、醫師も注意せよと云つて
 立ち歸りましたか、其日より第五日目の事、床の中から重たき
 頭を掻き峰作「コレ安太郎や、一寸此處へ來なされ安太「ハイ、何に
 か御用で……峰作「イヤ私も何うやら今度は死病らしい、其れに
 附いてはお前に生前の際に言ひ遣したいたことが有る、と云ふの
 は外でもないが、今日までは親子の様にして暮らして居たが、
 實は貴方は此の伊丹の在で名高い豪家、茂左衛門氣の息子さま
 でございませぬ、此の處が、貴方の實の阿母さまと申しますは、茂
 左衛門さんの正直に引き替、心の曲つた人で、到頭博徒團平と

郎太安の天喜歡

奥田喜平次と云ふ、お濱さまのお父上とが云ひ合せ、主人の茂左衛門さまが、先妻様の子、與之助さん、三人を連れて大阪の方へ奉公口を尋ねに参られた留守中を幸いに、三人を賣拂ひ、其の金も懐中田畑畑まで前からは火を付けて焼拂ひ、何處にも無しに逃げに、入れ、剩へ、宅には、火を付けて焼拂ひ、何處にも無しに逃げ出、したでございませぬ、と、其の夜、貴方は其の火の中で、焼、け、死、んだと思ふた貴方が、天様の頃から茂左衛門さまが信心致してござる甲斐有りて、喜、天様の蔭で、斯うくして救かり、今日まで私の宅では、暫、時は、罷つと差し俯伏して居りました、事落なく、今日まで私の宅では、御禮の申し様がございませぬ、併し産の親より育ての親とやら、私、し、は、飽、ま、で、も、お、二、人、を、實、の、親、と、思、ひ、ま、す、峰、作、イ、ヤ、其、れ、で、こ、そ

郎太安の天喜歡

私等二人が育てた甲斐が有るら云ふ者です、鑿太して其の茂左衛門と申す、私しに取つては産の親、其の後は大阪から何んとか、消息でもありましたか、御存知じやありませんか、峰作「サア其件じや、茂左衛門さまが大阪から歸るを、浦江の聖天さままで待伏せ、た三人の悪徒、云はづと知れた奥田に團平、其れからお前さんの實の阿母、到頭茂左衛門様は無惨の御最期、今では貴方の身寄と云つては有りませぬが、腹違ひでこそあれ、天にも地に、も、貴方に取つてはたつた一人の兄さま、その與之助さまは、何んでも其後は大阪で永らく奉公もせず、劍術にお熱心遊ばす、このこと、實に貴方の前で峰作が、今安太郎の身の素性、初め、ます……」と、床の中から峰作が、今安太郎の身の素性、初め、て、明、す、言、の、葉、を、罷、つ、と、涙、と、諸、共、に、殘、ら、ず、聞、い、て、安、太、郎、ア、無、念、の、齒、齧、を、致、し、て、居、り、ま、し、た、が、今、に、見、て、居、れ、何、う、す、る、か」と

尋ね出さねば相成らぬ、それ致しても、第一劍術を稽古致さ

後路から佐渡ヶ島、南は紀州熊野浦、草萱別も兄上の安否

でも六十余州、西は九州薩摩、瀨田から、東は蝦夷に松前、北は越

は行く術は知れづ、ア何うしやうか、オ夫や、廣いや

便りとするは天にも地にも一人の曲つた、兄之助、其れも今

の義理有る親は一人、云はす二人まで見送り、實の父は悪人

ん、後を慕て泉下の客、噫、客太郎、世間は廣い、誰を便りにせ

たぬ中に、又も、婆さんが、野邊の葬式も、尾首能く了り、同峰作爺さ

最早証方なく、
再び歸らぬ死出の旅路を、行く人となり、は、安太郎も

歳を一、期となし、た、へ、老花でも、亦來春には、咲例しは有れど

棍徒に、突飛された時、頭を、健かに、打た、のが、因となり、七十八

時に、ドツカリと、寝間の、中に、横になつたが、茲に彼の氏神で、

ねば永の道中、又、万一にも、毒婦のお濱に逢はんにも、限らず、

万一逢ふた、其の時こそ、母であらうが、仇は、父上の無念晴

さで置くべきかと、堅く、臍を、確め、姿さんの葬式も、濟み、爺さ

んと列べて、婆さんの石碑も、立て、遣りました、之れらが、世に云

ふ、一、蓮、托生と、申すので、ございませう、四五日は、何に彼、

オ、
と云ふ、様、な、者、は、有、り、ませ、ん、が、賣、拂、ひ、ま、し、た、と、こ、ろ、で、別、に、是、れ

朱、其、れ、を、懷、中、に、入、れ、ま、し、て、先、づ、心、指、す、の、は、彼、の、大、阪、の、今

橋、筋、と、や、ら、に、道、場、を、開、い、て、居、る、白、澤、權、四、郎、と、云、ふ、先、生、其、れ、へ

行、き、劍、術、を、授、け、ら、れ、後、に、な、し、て、の、鹿、島、立、ち、村、は、づ、れ、ま、で、來、て、偶、と、横

伊、丹、の、在、を、後、に、な、し、て、の、鹿、島、立、ち、村、は、づ、れ、ま、で、來、て、偶、と、横

手、の、白、壁、を、見、て、思、ひ、出、し、た、様、に、安、太、オ、此、處、は、源、養、寺、何

日、も、た、爺、さん、や、婆、さん、の、石、碑、の、前、に、來、ら、れ、る、や、分、ら、ぬ、永、の、別

れ、か、も、知、れ、ぬ、終、り、の、參、詣、で、も、致、し、て、參、ら、う、と、獨、言、を

へも後日何日參詣れるやも分りません、から先お別れに來まし
 んな事、病に掛り、死んでしまふやうな事、分りません、
 草葉の蔭から見て居る下され、諸國を廻るに附いては、何時か
 思ふ存分に晴して居る心算でございませぬ、父の仇、我が家の
 まして、母とは云へお濱に會ひました、兄さんの與之助に會ひ
 廻り、お母さん、お濱さん、お濱さん、お濱さん、お濱さん、
 も、好い處へ、お濱さん、お濱さん、お濱さん、お濱さん、
 爺さん、爺さん、爺さん、爺さん、爺さん、爺さん、爺さん、
 之れ迄に、爺さん、爺さん、爺さん、爺さん、爺さん、爺さん、
 安太郎は、息のある者に、安太郎は、息のある者に、
 て、眠ると、息のある者に、安太郎は、息のある者に、
 を致しまして、源養寺の門内に這入り來たり、一文花を供へ、
 云ひながら、源養寺の門内に這入り來たり、一文花を供へ、
 線香を立て

た……と活る者に云ふ如く、泣きつゝの別れを告げ、立たん
 とせしが、之れが今生の別れになるやも知れんと思へば、何故
 此の處が安々と立ち退けませうや、心は後に掛ざれず、何時
 で斯くは、果てしなく、氣を取り直して、安太郎は、漸うのこと
 に、其處を出で、和尙の如く、後々の事をたのみ、寺を立ち出た
 安太郎は、心指すは、大阪の如く、後々の事をたのみ、寺を立ち出た
 た、最も、靴は、早くから出立、漸うの事、今橋筋へ來たり、
 下り、大坂へ着、早から出立、漸うの事、今橋筋へ來たり、
 權四郎と云ふ先生、道の場、尋ねると、直に、立派な門、其の傍ら
 儘に來て見ると、オツと白壁の構へで、立派な門、其の傍ら
 は、檜の一枚板に、墨と白麗しき筆跡「真免二刀流指南所、
 澤權四郎近利」と、安太郎は、門構への中へ這入り、玄關へ來たり
 や、此處じやと、安太郎は、門構への中へ這入り、玄關へ來たり
 安太郎お頼み申します、お頼み申します、と、案内を乞ひまする

と、其れへ出て参りましたのは二十五六の一人の門弟らしき男
 「何誰でござります安太「ハイ、白澤先生の宅は此方様でござ
 いますか取次「左様でござりますが、貴方は何處からお出でにな
 りましたか……安太「ハイ私しは伊丹からまいりましたもので、當
 家の生先に先日大變御厄介になり、危なきところを助けて頂き
 ました、百姓峰作の悴れ安太郎と申します者でございるが、
 折入つて先生にお話し致したい事がございますので、今日参り
 ましたのでございます……」と、語る安太郎の顔を昵と腫めて
 居りましたので、彼の門弟、確と膝を打ち笑ひを含め取次「オ、其
 れで相分つたが、先程から何處かで見た顔じやナと思ふて居たが
 フン、彼の時の峰作とやらの悴れであつたか、拙者は彼の時先
 生のお供を致して居つた、葉田政之助と申す者じや安太「オ、
 其れぢや、貴方は彼の時の御門弟衆でございませうか……」と
 嬉し氣に安太郎は云ふ政之「シテ、お前の父は御無事か、また其

の後で棍徒の奴が返報に來やしなかつたかい……安太「ハイ……
 有難うございます……」と、シクシク泣き入る様に葉田政之
 助は、偕ては何にか事情があるに違ひないと思ひ、兎角くを聞
 くより早くや先生先に逢はせて遣らうと政之「安太郎さん、暫時
 待てお居で、先生に取次いで上げるから安太「ハイ、有難うござ
 います、何うぞ宜ろしくお取次ぎを願ひます」と、兩袖で、涙
 を拭いて居る、葉田政之助は其處を立ち、奥へ此の事を知らし
 た者ど見え、暫時して又玄關へ出て参りましたが政之「アノ安太
 郎さん、先生が早速奥へ通せと仰しやつたから、草鞋を脱いで
 ……、サア此處に洗足がある安太「ハイ、有難うございます」と
 足を洗ひまして、政之助の案内に連れられて奥へ通りました、
 來て見ると白澤先生は、稽古も済みまして、今一室にあつて御
 休憩中、敷居越しに兩手を支へて安太郎「先生様、今日は……」
 と、云つた計しで早や涙は兩眼に一杯、何んと語るも泣呢り、

言葉は今泣く泣くに差俯向き居るを見て白澤權四郎近利先生「コレ安太郎、何故左様泣くのじや、其後は爺さんも婆さんも御無事かい……、ッ、泣て居つたて事情が分かりやしない安太「ハイ……、其の……、ふ、二人ともは、死にました……」と、云ひ了ると、今は堪らず、涙だは堰を押し切りて、ワツと計りに泣き伏せました、聞いて白澤先生は「何んと申す、爺婆二人共死致したと申すのかい、トハ又何う云ふ譯じや、早やく語つて見よ、男が泣くと云ふ事が有るか安太「ハイ」と、白澤先生に願ひ込まねば成らぬと、顔を差上げた。

第五席

差上げて先生の顔を一目見ると、今の處では此の先生一人しか

便りにする人は無いか、兄は有れども行衛は知れず、今の自分の境遇を考へると、またも急來る涙、人の涙は眞の情、是れで座り直して安太郎「先生、思はず知らづ涙を流しました、なんとも申し譯がございません、實は斯う云ふ譯でございませぬ、日氏神の境内に於きまして、先生に危ないところを助けて頂きました、其の習る日から云ひますものは、ドツと床に付き薬も其の功はございませぬ、十日と立ちませぬ中に爺さんは死去を致しました、其の死に際、初めて聞きませぬ中に爺さんの身素性、斯うく思ひました、野邊の送りも濟ま

し、ヤレ、斯うく思ひました、野邊の送りも濟ま

まして、之れも醫者薬の功も無く、到頭二人とも見送りまして

ございませぬ……」と、落物なく語りました、歸つと聞き居た白

郎太安の天喜歡

澤「先生、フン左様か、其れは何うも可愛そうな事じや、併し
今お前の話を聞けば、大百姓の茂左衛門とやらやらの倅じやその事
して其の兄の行衛は分つて居るのかい……安太「ハイ、其れが分
つて居りますれば、少しは便も有りますが、何分、行衛は今分
どころで分りませんのでございます。白澤「フン、爺婆には死に分
れ、一人の兄の行衛が別らぬと申すのか、其れは可愛想だ……
安太「附きましたは、其の兄なり母とは云へ毒婦のお濱を尋ね出
だす心算で、諸國を巡廻と思ひますが、万一も父の仇敵家の仇
たるお濱に逢ひましたる時、討取りますには、第一劍術が用
ます、又道中でも何んな事が有るかも知れませんが、
に先づ一月ほど劍術を教へて頂からうと、今日其れをお頼み
に参りましたのでございます。白澤「ハ、ハ、ハ、ツ、安太郎、一月や二
月、劍術を學うたどて何になるか、劍術と云ふ者は左様早やく
覚えられるものではない……安太「ハイ、先生、劍術は一月や二

郎太安の天喜歡

月では何んにもなりません。白澤「左様……安太「其れでは一人前
にならうと思ひますと、何日ぐらひ掛りますか。白澤「左様じや
ナ、一人前にならうと思ふと、其の人の氣にも寄るが、ザツと
十年じやナ……安太「ハ、ハ、ハ、エ、十年、十年、十年も私しは劍術
を學ぶ事は到底出来ません。白澤「何故じや安太「何故つて先生、今
から十年立つてから私しが日本國中が廻れますかい……白澤「ハ
ハ、ハ、お前さんは今何歳じや安太「ハイ、十三才でございます
白澤「ハ、十三才か、随分大身の方じやナ、私はまた十八九かと
思ふた、大きな身体じやナ、併し今から十年立つた處で二十三
歳じやないか、其れからでも日本國中は何遍でも廻られるもの
じや安太「ヘエ、其れからでも日本國中は廻られますか。白澤「えら
廻れじや、ソレお前も知つて居るであらう、應舉と云ふ畫書の
先生を知らんか……安太「ハイ、彼の幽霊描きの先生ですか、
さ先生を知らんか……白澤「彼の應舉と云ふ先生が、京都九條家から

の命により、活た幽霊を描けよとの御所望が有つた時、ハイとお受けはしたが幽霊と云ふ者を見た事がないだから、日本中を廻つて幽霊に出會はうと思ひなされて、一度日本中を津々浦々とお廻りになつた、ところが幽霊には出會なかつたさうだ、そこで又も日本國中をお廻りになつたが出會はなかつたさうだ、三度目に備前の岡山で活た幽霊に出會したと云ふ事があるから、日本中位には、二十三歳からでも何遍も廻れる者じや安太、ハイ左様でございませうか、其れでは先生の弟子とさして頂き十年間の稽古をさせて頂く事に致しませう、白澤併し、安太郎、其方が劍術を稽古仕やうと云ふのなら、そりや弟子にも致さう、けれど私の弟子と成つた上は何に事も考へずと、只一心に劍道に心を寄せねば駄目じやぞ安太、ハイ、其りや一生懸命になります、白澤、フン、其れでは今日から、お前を弟子と致す事に致さう」と、快よく白澤先生は去はれた、喜こんだのは安太郎、其の日は濟

んで翌日から其の隙間々々には道場へ来て稽古を見て居る、白澤先生は非常に氣に入つたものと見えて、何に事をするにも安太郎いや、安太郎と、可愛がつて遣られる、安太郎も亦骨惜みせず立働らく、其の中に一月ほど経過したが、安太郎は未だ一遍も稽古をしたことがありません、一度彼の竹刀を振つて立合うて見たいものじやと思ふて居る、或日の事、先生は一寸外出へ行かれてお留守、安太郎は一の高弟櫻間矢五郎と云ふ人の前に来て安太、先生、矢五、何んぢや安太、何うです、一ッ遣りませうか、矢五、ハ、ハ、何にを申すのじや、お前等がまだ拙者に向はれるか、安太、何んの彼んのだ、偉ら相な事を云つて居らつしやい、ますナ、矢五、何んが偉ら相じや、當り前じやないか、安太、ケド立ち合て見なければ腕前は明りますます、矢五、其りや左様じや、安太、其

れじや一應立ち合つて下さいナ矢五、五月蠅奴じやナ」と、仕方
 がないから立ち上りましたが、考へて見ると侮れぬ、斯奴は何
 んでも先生の話を聞くと、死にかけてた處を歡喜天様の御靈驗で
 助かつたとのこと、ひよつとすると劍術も其のダンで知つて居
 るかも知れぬと、今までは侮つて居たが、急に怖氣を指して來
 た、併し安太郎は劍術などは少しも知りません、また知り相な
 等がない、只毎日道場の稽古を見て居るから、一度遣つて見た
 いと思ひました迄でございませぬ、櫻間矢五郎は竹刀を取つて立
 ち上りました、安太郎も續いて立ち上つた、道具は毎日見て居
 るから、早速と支度を仕て道場の中央に出た矢五、サア、其れで
 は一ツ稽古を致して遣らう」と、云ふと安太「ハイ」と、答へて
 竹刀を斯う大上段に振り被つた、此方は中段に構えた、矢五郎
 が安太郎を見ると何んだか身体の構へが出来て居れ、けたども
 隙だらけだ、が矢五郎も考へた「斯りや確實劍術の極意を極め

て居るのに違ひない、隙は無理に見せて居るのであらう、迂濶
 に打込んで不覺の原因」と、大變な處へ氣をまはした者でこ
 さいます、只々ヤツと、氣合を掛ける、安太郎も何んだか判
 明ぬが、矢五郎がヤツと云ふと、同やうにヤツと云ふ、暫時く
 間は互に睨み合つて居りましたが、矢五郎は一生懸命、打込みも
 せずやツと云ふと、安太郎もやツと云ふ始末、どころが安太郎
 大上段に振り被つた始めの中は宜かつたが、段々と腕が倦怠な
 つて來たから、了ひには斯う頭の上え持つて居た竹刀を、到頭頭
 の真上に乗せて了つた、サア斯くと見た櫻間矢五郎は怒つた
 「人を侮るにも事かへて、竹刀を頭の上に乗せて了ふとは余
 りと云へば人を侮辱致したしかた、最う斯うなれば破れ被れち
 や、打ち込めば遣られると定つて居るが、仕方が無い」と、今
 しも矢五郎「ヤツ、お面一本ッ……」と、來た、ヒシヤとお面
 を遣られた安太郎、ヒヤ……と云つたが、何にしろ矢五郎は一

生懸命、力の有限り打込んだものだから堪らない、ハッ、ハッ、と、其れへ平太倒り安太「ヒヤ、助けて呉れ——ッ」と、上た、矢五郎は竹刀を捨て、進み寄り矢五「コリヤ、安太、何うじや参つたか安太「マア参りましたも、すんでの事で冥途へ迄参り掛けました矢五「ハ、ハ、ッ、併し安太郎、お前は實際何んにも知らぬのか安太「知らぬも知つてるも、未だ一度も稽古を仕て下すつた事が無いじや有ませんか、其れに櫻間さん、彼んなに酷く打つたなんて、余んまり無茶じやありませんか、ア、痛やの、ア、ッ、斯んなに頭が盛上つて居やがる」と、頻に頭を撫で、居る、櫻間矢五郎は「今さら面白うて仕方が無い矢五「ハ、ハ、ハ、イヤ安太郎勘忍して呉れ、實はお前が剣術を知つて居る者じやと私は思ふてナ、一生懸命に打ち込んだのだから……ハ、ハ、ハ、安太「ハ、ン其れでぢや、矢五郎さんが何故俺位いに稽古をするに汗を流すんだらうと思ひました、スルと矢張私の構へに其れ

だけの價値が有るので、矢五「フンマア左様じや、ハ、ハ、ハ、ッ」と、笑つて居るところへ先生がお歸りになつた、皆が出迎へて、其の日も時刻が来たので皆門人衆は歸宅をする、残るのは内門弟が二三人と安太郎、夕飯も済んだ、權四郎先生は安太郎をお呼びになつて、肩を摩す、色々と安太郎に面白い話を仕て遣つて居られた、ところが安太郎は「先生、權四「何んじや安太「私は今日の様な残念な日は有りません、權四「何故じや、今日は何んぞ残念な事でも有つたのか安太「有つたも先生、一寸此の頭を見て下され」と、權四郎先生の前へ頭を突き出した、權四「ホ、ウ、大變腫れ居るぢやないか、一体何うしたのじや安太「ハイ、實は今日先生のお留守に斯うくでございます」と、今日道場の事を話した、權四「ホ、ウ左様か、其れでお前は櫻間を怨むと申すのか……安太「イエ、何んで櫻間さんを怨みまじやうや、怨むと申しまするは先生でございます、權四「何にッ、此の私を怨むと申すのか、

私はお前に怨みを受けける覚えは無い筈じやが……安太「先生には無い筈でも私の方には有る筈でございます。權四「何う云ふ怨みじや申して見よ。安太「左様じや有りませんが、私は此の道場へまゐりましてから、指折り數へますと早や一月になりませぬ。權四「如何にも左様じや、一月になる、其れが何うしたと申すのじや。安太「どころが先生から未だ一度もお稽古をして頂いた事は有りませぬ。權四「左様じや、未だ一度も稽古を仕て遣はした事はない。安太「サア其處です、其處に怨が有ります、其うでせう、一月前から稽古をして頂いて居りましたら、何んの今日でも斯く迄も不覺は取りませぬ者を、先生が稽古も仕て下されずに放たらかしになされました計しに、頭に迄斯んな癩を遣へたのでございませぬ、其れを思ひますと、先生が怨めしうてなりませぬ。權四「ハ、ハ、ハ、ツ、イヤ相判つた、私に怨みと申すのは左様云ふ譯か、宜し〜早速明日から稽古を致させて置らう。安太「ハイ、有

第六席

難うございませぬ。權四「稽古さへいたせば怨めしいと云ふのが晴るだらうな……安太「ハイ、其りや怨みもへチマも有つた者じやございませぬ」と、安太「郎は喜んで其の夜は寝に就いた、サア翌日から隙間々々先生直接のお稽古、其處へ安太郎は何んでもと思ひまする氣が有りますから、覺へが早やい腕が上るに従ひ先生も嬉しい、嬉しいに従がひ稽古が激しい、斯う云ふ譯で安太郎は一年立たぬ中に腕がメキ〜と上達した、ところが三年目に致つて、彼の伊丹で安太郎の義父峰作が氏神で突飛された云はば敵とも有るべき棍徒の信吉に出會うと云ふお話し、一寸吹致しまして次席に詳しく……

左右する中に年は明た、安太郎は本年が十六歳、一月二月は夢

の間、にすぎ、三月櫻の櫻宮、四月五月も打ち過ぎ、六七月は夏祭、八月も打ち過ぎ、世間は次第に秋めきて、一重も今日此頃は重衣の、毎日秋は暮れてまゐります、今日しも十月の中旬、白澤の道場も今日は休日と見え、朝の四ツ時分から高弟櫻間矢五郎と、安太郎とを呼出しになり、頻りに盃を傾けて居られる、安太郎は當年十六歳でこそあれ中々能く呑みます、四方山の話から、魚釣りの話にうつた、權四「何うじや矢五郎、過日木津川尻で釣れたな矢五、ハイ、左様でございませすナ、彼の時計りは面白程釣れましたナ、併し先生すりは釣りに掛りては私しの方一枚上ですナ權四馬鹿言へ、……安太郎は何うじや、魚釣りは嫌ひか……安太郎「ハイ、魚釣りでございませるか、魚釣りでございませたら、一日や二日はお飯を喰わなくても釣つて居ります、伊丹に居りました時分でも隙さへ有れば小池へ鯛釣りに行きました、大阪では此處へ參

りますのでございませす權四「左様じや、マア大川から、ツツと下では尻無尻か安治川尻、木津川尻と云ふ様な處じやナ、ナア矢五郎……矢五「左様ですナ安太郎「此頃では何に釣れます……權四「左様じや、近頃では……最う十月も残り少ないからな、マア、大体は鯨釣りじやな安太郎「ハ、鯨釣ですか權四「最う鯨も大きいし、是れからの鯨は正月まで持てるからナ……併し安太郎は鯨釣りに行つた事は有か安太郎「ハイ、鯛釣は致しましたが、鯛釣は致した事はございません、矢張長い竿で岡から釣るので、すか權四「イヤ左様じや無い、竿は短くて舟の上から釣るのぢや随分面白いぞ安太郎「左様ですか、舟の上からじや面白いでせうナ……權四「フン、何うじや矢五郎、安太郎を連れて、幸い今日は道場も休日だから、大川へ釣りに參らうか矢五「其りや有難いですナ、好い和日だし、ロハだし……安太郎「櫻間さん、ロハとは何んの事です矢五「ハ、ハ、ツ、ロハを知らんのか、ロハとは片假名

の口の字をハの字を合はすと、漢字の只と云ふ字が出来たら
 うが……安太ハ、ン判明ました、ロハとは只の事ですか、
 成程、伊丹に居る時分に皆衆が云ひました、大阪と云ふ所は生
 馬の目を抜く所じやと何時も云つて居りましたが、成程、ロハ
 か……、好く出来て居りますナ……、權四コレ、安太郎安太
 ハイ、權四宅じやから宜いが、外で左様な事を申して居ては他人
 に笑はれるぞ、何んでも無い事を感心する奴じやナ、矢五其れじ
 や、先生お供させて頂く事に致しませうか、權四左様じや、安太郎
 も連れて行つて遣るから支度を致せ、安太ハイ、有難うございま
 す、こ、喜んで支度を、矢五郎は釣り道具を引張出した、
 安太郎は先生の伝附、三升樽を引つ擔いで出掛けた、今橋から
 舟に乗り、最も船頭付きでございませす、乗つたのが恰度お正
 午過ぎ、大川へツツと出まして、難波橋まで下つて参りました
 が、中々能く釣れます、暫時此處で釣つて、一度天神橋の下へ

舟を着けさせた、どころが前の難波橋の下とは違つて少しも釣
 れません、權四何うじや安太郎、引くかい……、安太先生残念なが
 ら少しも引きません、櫻間さん何うです、矢五拙者とても其の通
 りで……、先生の所の方が余程よく釣れました、權四左様じやナ
 其れでは兩人、魚が集るまで一寸一杯遣らうじやないか、竿は
 下したなり捨て置け……、兩人「ハイ、有難う」と、安太郎は幾程
 釣れなくても酒よりは竿番の方が面白い、併し腹も空つて来たか
 らと、竿を置いて此方へ参りかけた時、竿が急にグツと撓つて
 来た、オヤツと早速引き上げやうとする中々重い、漸う水際
 まで引上げて来た時、橋の上からシャク、シャヤツと頭の上へ、
 生温い物が浴つて来た、安太郎は驚き、ヒョイと橋上を眺める
 と、失敬千萬な、大きな鯨の口からドウと遣らかして居る
 サア安太郎は怒つたの怒らないので、先生も矢五郎も怒つた一同船頭
 ツ、舟を岸に着けよッ船頭「ハイ」と、云つたが船頭、岸に舟を

着けたか最後、す々に切り殺されるは極つて居ると、成丈暇を
 入れて居る安太「コレッ船頭、早やく舟を岸に着けんかッ、具圖
 々々致すと汝から斬り捨てるヲッ船頭今直ぐ着けます」と、驚
 いた船頭、斯りや具圖々々して居ては此方へお鉢が廻つて來た
 ら大變だと、急ぎ舟を南岸に着た、舟が着か着ぬの中に、拔身
 を引提て飛び上つた安太郎、續いて白澤先生に櫻間矢五郎も飛
 び上つた、天神橋の南詰へ出た時は既に橋の中央まで當の男は
 渡つて居た、其の男の風体を見ると、二十八九の男で、大分酒
 に酔つて居るらしい、ヒヨロ／＼として行く、積多ない風体安太
 先生、彼の向うへ行く酔でございませう權四「オ、如何に
 も左様じや矢五早く行つて斬り捨てなされ……」權四「併し實否を
 糺しなされ安太「ハイ、畏りました」と、一刀を引提たまゝで、
 彼の長い人通りの多い、天神橋の上を、水も滴る様な美男子、
 年齢も行かぬ若櫻、素足のまゝで一目散に馳出した様は、實に

筆にも言葉にも盡されぬ程の有様、一目見ても惚々する勇しき
 姿、續いて二人も馳出した、躡つて安太郎は酔泥れの後方に走追
 り、大音にて安太「ヤイツ、酔泥れ者、暫体く待ッ」○「何にッ、
 酔泥れつて俺の事かい……」安太「只今橋上から、小便を致したの
 は汝かッ」○「オ、乃公だッ、シ、小便を仕たが何んどしたい
 ……」安太「汝の致した小便が下に居た拙者に掛つたワイ、サア、
 其處へ直つて詫を致せ」○「ナ、ニッ、ワ、詫ろッてかい、臂が
 阿呆れらア、何んの因縁で汝等の様な小供に詫るんだい安太「ナ
 、何んだッ、汝の目には是れが見えぬか……」と、一刀を突
 出した、○「へ、ちよつコラコと味を演りやがるナ、ハ、ハ、
 ッ、其んな刀が怖い様では日本六十餘州を股にしての商賣が出
 來るか、他の者ならヘイコレはお詫もしやうが、ヘン云つて
 も人に兄哥と尊敬られる世荒の信吉様計しは詫はしないよ、ハ
 、ハ、し、と、年若と侮りたる此の言葉、今走せ着た權四郎先生

ヒヨイと見ると、何時ぞや見た顔附、サツと言葉附きから、聲を考えて居た白澤先生、先生、オ、左様じや、ユレ安太郎、容赫を致すな、汝のためには父の仇じや、見事に討ち取れよッ、安太、エ、ッ、斯奴が……、白澤、オ、左様じや、耳を見よ耳を、右の方が無いじやろ、其れが證據じやぞ、安太、其れでは父の仇、見事に討ちますから、先生も櫻間さんも御見物を願ひます、矢五、オ、安太、郎さん、充分に怨を晴しました……、權四、安太郎、日頃授けし業は今茲で現はせよ、安太、畏りました……、ヤイ信吉とやら世荒とやら汝忘れもすまい三年前、伊丹の在の竹島材で、氏神様の秋祭りの際、我が父の峰作の、財布が奪れ損なつた故、突飛したであらう、其れが原因となりて父は病死を致した、之の不禮、改心致して居れば助けても遣はずが、今日また我れに之の不禮、改心致す有様じや、此處で汝を討ち取りて、此の大川へ投げ込めば、流

れ、て大海で、鮫や鯨の餌食と相成るであらう、其うすれば汝の犯せし罪も幾分か減ぼせるであらう、其處へ直つて覺悟を致せッ……、○「何んだと、父のか、仇ッ、馬鹿な事を吐すない、其んな覺えは無いはい、仇討だつて笑はせやがらアハハハ、安太、黙れッ、汝の其の耳は如何致したかッ……、○「エッ」と、云つたが、急に逃出さんと致しました、最、早、人垣で四邊は取巻れて居る、逃ぐるに通なき此の處の有様、狐度胸を定めた世荒の信吉、「しやら臭せえ、之れなど喰らつて斃たッ」と、懐中の短刀抜くより早やく斬り込んて來た、何んの安太郎が彼れ等如きに斬られてなりませうや、ヒラリと身を躲した、空を打たされてトントン、踏踏、奴を手でせよ、一刀、取り直すが早業、ハラリズンと斬り下げた、師匠、白澤權四郎、先生から貰ひ受けた鮮血、ハツと迸しり、信吉の首は詞と離れて一間ばかりも前へ飛

んだ、見物も先生も矢五郎も、ワツと計りに賞めやした、纏て
 一刀を鞘に納めた安太郎「先生、死骸は如何に致しませう 権四」
 オ、安太郎、好く出来た、三年間の修業も其れでこそ甲斐があ
 る、天晴じや、矢五安太郎さんの手の中美事々々 権四「シテ其
 の死骸は此の大川へ投込みなされ安太、イ、畏まりました」と
 向に轉げて居る首の鬚を引掴み、小石を投るが如く、川中に指
 してドブン……、續いて胴体も引掴いで、ドブン……、水煙け
 を残して何處を目的ともなく行く人となつた、實に未まで保つ
 花は無いと此處らの事でございませう、世荒の信吉も伊丹の
 氏神で耳部を切られて以來、誠の人となりて、改心を致し、假
 令乞食になつて居ても心さへ改め居れば、斯様な事もありませ
 まいに、なほ飽不足も、他人の物を盗み居た其の報、報は誰に
 來ませう皆自分に来る、五十年の長命を半にして滅したも皆自
 分のなせし業、火の車、造る大工は無けれども、己が造りて己

が乗るなり、見物の人も誰一人として信吉を裏れと思ふ者もご
 ざいません、唯安太郎の腕前を感ずるのみでございませ、其の
 日は最う魚釣も止めまして、主従三人は道場へ立ち歸りました
 何にしる武士が棍徒を無禮討ちに致したのでございませから、
 別に答めはありません、三人は早速と湯に這入りまして、着
 物を着替へ、夜に入つてから、直しにと、盃を重ねて、先づ
 其の日は事済みとなりまして、其れより朝と明け夕べと暮れ、
 月日は矢を射る如く、一度射放せば歸り來らすの如、關守なく
 に進み、早やくも茲にまた、二年と云ふ星霜を送つた安太郎、
 恰度今年にて、涙ながらに伊丹を出てより五年間、辛苦を舐て
 修業を致した甲斐ありて、五年以前の安太郎とは實に雲泥の相
 違で、今では最早や、神免二刀流を腕に練込みまして、大した
 者でございませ、所が茲に一ツのお話が沸て参りました、と申
 しますは外でもございません、此の白澤權四郎と申します先生

には一人のお娘さんがございました、名をお糸と申しまして、當年が十七歳、花なれば當、何時誰れが彼の蓄みを咲すであらうと、世人も噂を致します妙齡、背は高からづ低らず、中肉中背、髪は漆の如くでございまして飽迄黒く、其れを斯う文金にと来て居るから堪た者じやございませぬ、目は鈴の如く、口元には愛はございませぬが、何處とも無くに威がございませぬ、一度お糸さんに相類の醫より沸でる笑ひ顔を拜ませて頂だいた日にや氣の弱々奴は魂も天涯に飛去り、絶命は即座に前目でございませぬ、併し金龍などは左様な事はございませぬ、愛讀諸君、人と云ふ者は諦めが感心でございませぬ、デんで自分の相手にする娘子じやないと思へば笑ひませうが何う致しませうが願着はありませぬ、併し女の笑顔は悪くは有りませぬナ……、ハ、ハ、ハ、之れは誑ちやございませぬ、只今白湯を呑だのが溢れたのでございませぬ、ところが此のお糸さんが、近頃では毎日通つて

お出でになら織物屋行きもヒツタリと止まつて、床に附く程の病でもありませんが、只ブラ〜と仕て居ります、今日例の道場休でございませぬ、先生は他家へお出まし、奥さんも一寸お使に居られた留守中、頭も彌生の頃とて、一室に在りて讀書を致して居る安太郎も、氣が斯う浮々と致して参りました、折柄襖を開けて這入つて参りませぬ、安太郎の顔を見て得も云はれぬ嬉し相な面持ちにて、手に持つて参りましたお茶盆を指し出しお糸安太郎さん、御勉強でございませぬ、春の日永に粗茶一ツ……」と、斯う云つた計しで、早や顔にはハツと時ならぬ紅葉、散るも道理安太郎に初戀を致しましたお糸さん、言ふに言はれん我が胸を、人目の垣に隔られ、燃たつ思ひの胸の中、今日の留守をば幸ひと、來たは來たが、今日の前、想ふ安太郎さんのお顔を見れば、戀しさ耻かし、尻と俯向く閑雅さ安太郎、お嬢さん、斯れは何うも有難う

ございます お糸「ハイ、安太郎さま、私は貴方にお嬢さまとは……私はお嬢じやありません……安太「ハ、ハ、ハ、イヤコレは失禮様最う貴方も當年は十七才にお成り遊ばしたから、何時までもお嬢様では變でございます、其れでは之れからはお糸さまでもお申しませうか お糸「イエ、お糸様でもありません、オ、お前とか……、オ、お糸とか……安太「ハ、ハ、ハ、お糸さまには何にを仰しやるのか全然判明しません……お糸「エ、是れまで貴方を思ふ私の心が、まだお判明じやございせんか」と、今は最う堪らぬ娘氣の、グツと進み寄りまして、安太郎の膝の上のワツとばかりに泣き伏しました、サア此所で、安太郎の膝の上のワツとんが、如何なる事を述べ立てませうや、讀者諸君の氣をヤキとさせますのお話も、开は次席に詳しく一寸一吹致しまして……

第七席

月を頂き霜を踏み、馬や車を引く人も、四角四面の社衞を着た最と嚴めしきお姿のお武士も、人の物を盗む曲者も、鬼をも挫ぐ豪傑も、戀の心は皆一ツでございます、初戀のお糸さん、針取るにつけ、お膳に向ふにつけ、寝るにつけ起るにつけ、思ひ出すのは安太郎の事、腕前は有るし男前は好し、氣はハキ／＼として親切な、女に産れた甲斐あつて、彼んな殿御と添臥のと思ひ初めた其の日より、片時として忘れたことのない、今安太郎の氣の無き言葉に、堪り兼ねたお糸さん、男の膝にワツとばかりに泣き伏しましたから、驚いたのは安太郎「安太「オヤッ、斯れはお糸さま、何う遊ばす心算でございます、何うか放なして下されませ……お糸「イエ、放しません、私の云ふ事を承知し

て下さるまでは、何んな事があつても放しません、貴方は憎い
 奴じやと殺されよが私には本望でございませぬ、安太「斯りや困つたナ
 皆さんはお留守だし、若い男女が一室で居れば万一人目に掛つ
 た其の時は、其れこそ大變でございませぬ、此の手をお放し下され
 立ち下され、貴女がお立ちなさらねば、此の手をお放し下され
 ……お糸「デモ安太郎さん、貴方と私とが話を仕て居るのを、人
 が見ても何んの遠慮がありません者か安太「男女七才にして席を同
 くせづの教が有りますお糸「貴方は其の様なお堅い事はばかし仰し
 やつて……マア私しの云ふ事を一通りお聞下されませ、過ぎ
 にし頃から偶と相想て其の日より、忘れやうとしても忘れませ
 ん、貴方の事、起ては現寢ては夢、一相の事に此の胸を、云ひあ
 かさうかと思ひましたも人目の垣、幸ひ今日は阿父さまも阿母
 さまもお留守でございませぬ故、斯うしてお側へ近よりました様
 な譯、何うか私しの心を少しは御察しを願ひます……」と、云

ひ乍ら、尙も摺り寄り、顔赤らめながらお糸「耻をも忘れての今
 のお話、不束かな私でございませぬ、何うか貴方の生涯の女房
 として給ひ喃……」と、膝に顔をば摺り附けました、通常の者
 でございませぬ、併し安太郎さんでございませぬ、蛤か海鼠の酒酔の様
 フニヤ／＼となるのでございませぬ、安太郎「ばかりは左様じやご
 さいませぬ、併し安太郎さんでございませぬ、木の股から産れた
 者でもない、決してお糸さんを悪いとは思ひませぬが、人道と
 しては師の娘、手を掛けると云ふ事は決して出来ませぬ、安太「イ
 ヤお嬢様、貴女が左程に迄此の私しを思ひ下されるのは有難うご
 さいませぬ、其れは其の事計りはお忘れのほどを願ひますお糸「エ、
 ツ、其れでは貴方は私しをお見捨てばす氣でございませぬか……
 安太「イヤ、別に見捨てるの何うの云ふ譯じやございませぬが、
 今の處では何うかお忘れのほどを……お糸「ハイ、忘れませぬ、
 ……悉皆と忘れませぬ……安太「アノ私しの事を……お糸「ハイ、是れ

丈云ふても……、イヤ忘れました、安太郎さま覺悟を致しまし
 た……安太「エ、ッお覺悟とは……」お糸「ハイ、覺悟とは勘うでこ
 ざいます」と云ふより早く、帯の間より隠て持たる懐劍を取り
 出すより早く、今や鞘を拂つて己が咽喉へ突き立てんとする咄
 嗟「安太「オ、是れはお嬢様、ナ、何んとなさるのでございます」
 と、其の手をおさへお糸「イエ、お放し下さいませ、私しは
 死ぬのでございます、これ程にまで思ひ詰た戀しひ御方、見捨
 られて、何にを樂しみに生ながらへて居られませう、何うぞ死
 なして下されませ……」安太「お嬢さまも有らう貴方が、其りや
 何んと云ふ事でございます、馬鹿な事を大きな聲で……」お糸「
 エ、人に聞かれやう構ひませせん、私しは死ぬる覺悟でござい
 ます……」と、何時かな開入れる氣色もございませせん、途方に
 暮れたのは安太郎、左右する中に先生がお歸りになつては大變
 と、兎も角もお糸さんを此の室を立たさねばならぬと安太「イヤ

宜しい、お糸さまの思ひの通りになりませう、併し、今にお父
 さまがお歸りになるでございますから、貴女と私しが話しをし
 て居る所を見附られては、互ひの身の爲めに宜しうございませ
 んから、早く此處を……」お糸「エ、ッ、ソ、其れでは、此の妾
 を貴方の女房に……」安太「貴方が其れ程に思ふて下さいませ
 には、お糸「オ、嬉しやの、思ひ止まりました、何んで死にま
 すものか、死ぬる時どて貴方と一緒にやなければ死にませんわ
 オホ、嬉しや、安太「今日は此處を早くお立ちを下され、ま
 た後日宜しき折を見て、色々とお話も致しませうから、お糸「ケレ
 ド、妾は貴方のお側に安太「左様な譯には參りませせん、サア、
 お早く此の室を……」お糸「ハイ、我が夫さまのお言葉、背き
 は致しません」と、云はるゝまゝに嬉し相な顔をして、心は後
 に奥の方へ這入つて了ひました、ヤレ、と安太郎も安心はし
 たが、サア心配でなりません、若し此の様な事件が先生にでも

聞えた事なら、今日まで受けた、海よりも深き、山よりも高き
 大恩も仇で返すやうな事に成つて了ふ、と、色々と思案を致しま
 したが、是れと云ふ考へも出ませんから、其の明る日からは、
 成丈お糸さんの側人は近寄ぬ様に致して居りました、ところが
 思ひ事の中に有れば色外に現はれるの道理、此の頃では、お糸さ
 んの態度が怪可い、誰れも居ない處で獨言を云つては、ニコ
 ッと笑つたり、是れまで道場へ来た事は余り無いのに、近頃で
 はチヨコくくと來ると云ふ始末、或る日、安太郎が一寸用を達
 しに參りました後で、
 □木村氏 木村何んだ中林 中林貴殿は未だ
 氣が付き召さらぬか 木村何にがでござる 中林何にかつて大休分
 るでござらう、拙者が貴殿に話をすれば女の事でもござる、米の
 相場の話などは、ネッから仕た事が無い筈だ 木村中林ッ、
 は拙者に喧嘩でも買ひに來られたのですか 中林ハ、ハ、ッ、申談
 ちやありません、女の話を仕て居るのに、貴殿が何にかでござ

ると云はれるから…… 木村、フン女の話をござつたか、イヤ失敬
 々々、拙者は又、其の話が第一の好物でござる、フン、何處か
 に好い娘でも見附りましたかい…… 中林、好い娘どころじやあり
 ませんぞ、大變な事を御存知ないか 木村拙者は知らんナ、一体
 如何なる事でござるか 中林、貴殿も拙者も男なら切腹と云ふ奴だ
 …… 木村へ、ン 中林、其れ當家のお糸さん…… 木村、フン、
 豫て過日貴殿と早やく取りやいの約束がして有るナ 中林、サア、
 其のお糸さんがだ 木村、何うしたんだ 中村、近頃は怪可しな目付き
 で、其れ、當道場一の男前の安太郎さんに…… 木村、エ、ッ、開
 は實際でござるか 中林、何んの嘘を申さうや 木村、怪しからん事じ
 や 中林、と云ふて貴殿は立腹する様な譯がござるか 本村、イヤ、
 別に何にも無が、貴殿と云ひ、拙者等を前に控へさせながら、
 一番槍を安太郎さんに遣られれたとは返すくも残念でござる
 …… 中林、イヤ、之れも皆な自分等の両親が悪いのでござる、男

前に仕込まなれたからだ木村併し安太郎さんは嬉しい事だらうナ
 ……、ア、思へば腹が立つ中林「ケレド、向うとく、でする事だ
 から、他からは兎や角は申されませぬぞ……中林「シテ、先生に
 は御存じ無いのでござるか中林「如何にも左様、若し知れた處が
 一人娘のこと、安太郎さんは今何處と云つてたよりの無い身体
 だから、養子にでもするだらうと思ふ」と、噂を致して居る
 先程から用を達して来た安太郎、偶と次の室から聞くと自分
 お糸さんの噂でございますから、是れは大變、何んとか致さね
 ば相成ぬ、斯様な處に永居を致して居ては我が身の爲に宜くな
 いと、思案の臍を堅めました、或日の事に安太郎は、權四郎先
 生の前へ出まして安太郎先生、貴方に折り入つてお頼みがござい
 ます權四「何に、改たまつて何事じや安太郎「ハイ、外でもございま
 せんが、今日限りに安太郎にお暇を下さいますか……權四「何
 にツ、暇を貰と申すか安太郎「ハイ、御意にございます權四「フム」

と、暫時考へて居られましたが權四「イヤ宜し、望みと有らば遣
 かはす安太郎「ア、お暇を下さいますか權四「如何にも、併し、汝
 は此れより何處へ參る心算じや安太郎「ハイ、是れよりは、日本國
 中を馳廻り、一日も早く兄の無事な顔が見たく思ひます、又、
 諸國を廻りつゝ腕を磨く心算でございます權四「フン左様か、其
 れでは私もお前に一ツ頼みがある、何うじや聞いては呉れまいか
 ナ安太郎「エ、ッ、先生のお頼み、开は如何なる事でございませう
 とも、身に敵ひます事なれば何んな事でもお受けを致します
 權四「フム、其方も男なら定めし二言は有るまいナ安太郎「ハイ權四「
 然らば申すが、娘お糸の養子となつて我が家名を嗣では呉れま
 いか……安太郎「エ、ッ……權四「イヤ驚くな、豈夫二言わ無からう
 サア、フンと承知を仕て呉れんか安太郎「ハイ、ハイ、ッ、其の儀は
 かりは……權四「ナ、何んと否やと申すのか、ヨシッ、不束と有
 らば此方にも申し分がある安太郎「ヘエーッ權四「安太郎、知らぬと

思ふか、汝不埒にも師匠の此の白澤の顔に泥を塗た覚えがあら
う安太「エ、ッ、左様な覚えはございませぬ權四「云ふな安太郎、
汝何日や我れ留守中に、娘のお糸を……安太「エ、ッ、サ、左様
な覚えは……權四「無いと申すか……イヤ拙者も宜く知つて居
る、併し見込の有る其方故、我が家の相續は其方に頼まんと相
心得し故、今日が今まで黙つて居た、サア、フンと承知を致し
て呉れ、安太郎、家より娘を助けると思つて師匠の我が是れ此
の通りに頭を下ての願ひや」と、頭を下ての頼みに、安太郎
も今は否み兼て安太「イヤ先生、私の様な數にも不足ぬ者に、其
れほごまでのお頼とあれば、有難くお受も致しませう、併し私
しは先生も御存知の如く、兄與之助を尋ね出さねば相成ませぬ
身体、兄居所が判明ます迄は、何卒お待を願ひます權四「イヤ
快よく承知を致して呉れて何により嬉しいぞよ、また汝の中す
事も道理ぢや、終らば兄與之助とやらを尋ね出してからとして

何日は假盃、善は急げじや、ア、コレ奥や、お糸を呼びなされ
早やく、何に具圖々々致して居るのじや、女と云ふ者は
何をさして具圖へお化粧を致してお糸さん、母のお雪に喧しく、云
つて居る、處へお化粧を致してお糸さん、母のお雪に喧しく、云
父と安太郎の前に座つた權四「サア、三々九度の假盃じや」と、
花嫁花婿が、耻かし乍らに尾首能く盃も済ましたから安太「それ
では御舅さま、只今より出立致す事に……權四「イヤ斯りや面白
い、三々九度の盃を置くなり兄を尋ねに出立とは面白い、早々
準備を致すか宜からう母「ケレども良夫、それでは娘が可愛想
でございます、成らう事なら今夜一晩は睦まじく……權四「併し
兄與之助さんを尋ね出せば直ぐ歸る事じや、思ひ立つたが吉日
とやら母「それ左様でございませぬ、それでは娘や、其方も良
夫の旅立、準備をなされお糸「ハイ」と、供に立ち上り、色々と
準備をする、安太郎は兄の在家を索すと思へば天にも登る嬉し

さ、仕度も充分に整ひました、一室へ來たり、權四郎夫婦が坐つて居る前に來たり、兩手を支へ安太「ハ、其れではお二人様之れから出立を致させて頂きます權四「フン、其れでは一日も早く兄の在家を尋ね出し、我等に安堵をさして呉れ、また、是れは少しじやが、路用と致して呉れ」と、金子二十五兩を紙に包んで差し出した安太「ハイ、是れは何うも有難うございます遠慮無しに頂戴致します母道中は氣を附けぬと、悪い者が居りますから……安太「ハイ有難うございます」と、其室を立ち上つて表へ出て來る、急な事とて門弟衆も驚き、玄關まで見送つて來る、其の者に一々挨拶を致しまして、然らばと別れんとする、お糸さんは早や涙含みお糸「其れでは貴方……、お身体を大切に……安太「其方も身体を大切に致して、兩親さまを大事にして、私しの歸へりを待つて居て下されませお糸「ハイ、貴方のお歸りを待つて居ります……、シテ此の扇子は私しが心指し……」と、

第八席

差し出した扇子、受け取つた安太郎、サツと開けば歌一首、如何なる和歌でございませうや、いろく安太郎の道中記、首尾能く兄と出逢ひまするお話は是れからでございませ、一寸と一吹致しまして……。

借て安太郎は、出立の眞際に、お糸から心指しとあつて貰ひ受けた扇子、何心なくサツと開らひて見まする、墨色麗はしく、字は温和く「岩に急る、瀧川の」と、上の句が書て有ります、ニツコと笑ひ安太郎は安太「破れても末には逢んとぞ思ふ、サラば皆さま一同左様なれば安太「御免下され……」と、五年間の修業を致して久しき今橋の白澤權四郎先生の道場を後に見て、しき秋の一人たびでございませ、江戸は八百八町四里四方、百

万石の大名も、一文貰ひの乞食も、袖摺り違うと云ふ繁昌な土地と云ふ事を聞及んで居るから、一度江戸へ参ることに致さんど、兄を尋ねる一筋に、弓をはなれた矢のそれならで、ドシ／＼と急いで八軒やから三十石船に乗り込まん、来て見ると、今この前に出た處で、次の船が出るのを待たねば相成りません、其處で傍への一文字菓子屋へ這入りまして、舟の來るのを待つて居る、偶々何にか思ひ附いた安太郎は、其家の表に置いて有る一寸小勝な松の木を植つたのに眼を着けて安太「ナア婆さん 婆ハ、イ、何んでございます 安太「彼の向うの松の鉢植 婆「ハイ、安太「私に賣ては呉れますまいか…… 婆「ハ、ハ、ハ、彼んな粗末な松が御入用でございますか、安太「イヤ、一寸用るのじや 婆「お入用でございまして、遠慮なしに、何うぞ…… 安太「イヤ、其れでは賣て頂かう、此處に一分有るが、之れで宜からうな 婆「ナニニ貴方、其んな者は、お金子なんぞは…… 安太「イヤ左様云

はすと、他に茶代を置き、最う程なく船が來るであらうと其家を立ち出でまして、川邊に來たり、人の居ない處で其の松の木を引き抜きました、其の底へ、胴巻より取り出した二十五兩、其金を植本鉢の底へ入れ、上から以前の様に土を盛て松を植附けた、是れは道中で騙子を防ぐ爲めに安太郎が考へたものであります、粗知不顔で無造作に其の植木鉢を引提て、船の來るのを待つて居る左右する中に船が來た、上陸人は皆上げて了ひ船頭「サア、伏見行きが出ますぞ——」と、叫ぶ、待つて居た連中は皆乗り込む、安太郎も乗り込んだ、暫時して船は岸を離れた、其の頃は西に傾き、秋の淋さを増す寺の暮れの鐘すらかすかに聞こえた時分でありました、大阪の土地も次第と遠く成るに連れ、日は全たく影を落して來た、陰曆十月十三夜の月は淀川の水面に、光り薄く影を落して來た、面白眺めでございま

す、乗り合の客は色々とお國自慢な話をして居る中に、ギョギョ
 「此處は牧方鍵屋が浦よ、船唄の節面白く、頓狂な聲で唸り出し
 女が出て止める」と、漸く伏見の里へ着船致しましたの
 牧方も打ち過ぎまして、午前六時に到着、早速飯屋へ飛び込ん
 は、習日の明六ッ(現今の午前六時)に到着、早速飯屋へ飛び込ん
 朝食を済ませ、都を指て急ぎ行く、京都の名所古跡も勿々に見
 物も濟み、其の日は都の或る宿に泊り込み、翌日の早朝から立
 ち出で、大津、草津、石部、水口、土山、阪の下、關、龜山、
 庄屋、石薬師、と、此處までは別にお話も無しに参りました、
 石薬師の宿はづれより、安太郎の前になりして、尾掛
 て参ります一人の商人の男、到頭追分の宿で彼方から話し掛
 けた、〇モーシ、其處へ行くお武士、一寸お待下れ」と、足早
 にテッくと来る、安太郎は振り向ひて安太お武士とは拙者の
 事か……… 〇ハイ、失禮ですが貴様は何方へお行でになりま

す安太拙者か、拙者は江戸へ参る者じや、〇其奴は何によりの
 幸ひ、私しも、大坂の者で、店の用でお江戸まで参ります者で
 ございます旅は路づれどか申します、何うか私しをお供さして
 下さいますせんか安太其りやお前が連れにならうと云ふのなら一
 同に参る、〇有難うございます、大体お若いお武士と連立て居
 りますと、氣が丈夫です、此處は追分ですナ安太左様か、拙者
 は初めの旅で勝手は知らん、其方は道中の事は宜く存知居
 るかな、〇ハイ、私し等は際々江戸へ参りますから、大体は存
 知居ります、貴方さまは何處様で……… 安太拙者も大坂の者じ
 や、〇ア、左様でございますか、其れは宜いお連れですな」と
 色々とお話合せて参ります、旅は路づれどはよく申してございま
 成程、連れが有ります、旅は路づれどはよく申してございま
 郎も面白、男じやと氣を任しまして、其の日は四日市で宿を取
 りました、翌日は朝立ち出でまして、談りつ笑ひつ桑名の渡

しも事なく渡りまして、彼の男と連れになつてから第五日、掛川の宿に泊り込みました。毎日の如くに一寸一本銚子を取り例の植木鉢は床の間に置きまして、獨酌を吞んで居る。最も連れの男は直次ぎの室でございませう、今安太郎が夕飯をして居る處へ出て来た彼の男、疊に兩手を支へまして、昵と俯向いて居る、安太郎は變に思ひまして、安太郎「何んぢやお前は、ソリヤ何んの真似をして居るのじや、〇「ハイ、實に恐れ入ります、私は何に包み隠しませう、此東海道から仲仙道、木曾街道中を股に掛けて働きまする騙子でございませう、安太郎「エ、ッ、汝が彼の……騙子でお持になつて居ると見込みを附けまして、龜山邊りから尾子はお持になつて居ると見込みを附けまして、最けました、何うしても貴方の金子の置き處が分りません、最う是れ限り改心を致しました……、實に貴方には恐れ入りました……、安太郎「ム、ウ」と、安太郎、偕ては騙子奴が、植木鉢の底

に入れて有るのを知り居らぬと見える、と、ヒヨイと床の間の植木鉢に眼を附けた、安太郎「イヤ、汝が改心致したと有らば赦して遣はさう、當前ならば斬り殺す奴じや、早速此處を立ち去れよ、〇「ハイ、有り難うございませう」と、狐鼠々々、其處を立ち去りました、ヤレ、恐ろしい事であつたと安太郎は、其の夜はグツグツと寝込んで了ひました、翌朝は早やくから起居でました、其宿を立ち出でまして、ドシ、今日からはまた一人たび例の植木鉢は無造作に引提まして、日坂の松原へ掛つて参りました時、突然木蔭から現はれましたのは、昨日まで自分を附け狙うて居た例の騙子、安太郎は「サテは斯奴、飽造も己の金子を奪う氣か、宜しッ、左れなれば此の方にも存んち寄りがある」と、思ひ乍ら、スタ、と来た、彼の男は、大地に手を支へ、〇「旦那さま、昨夜は飛んだ失禮を致しました、安太郎、お前は騙子じやないか、〇「ハイ、旦那様さまには、未だ大事相に植木

鉢を持って、い、ございませぬ、安太「エ、ッ、
 ですが、其の中の金子は、昨夕の中に抜き取りましてございませぬ、
 安太「エ、ッ、此の植木鉢の底の金子を……」
 夜、私のお説をして居る時、ヒョイと眼を附けられたは、彼
 の床の間に置いて有りました、植木鉢、其れと悟りましたが、私
 の稼業柄……安太「ウム、一度詫しは此の我れを欺きしよナ、其
 れへ直ほれ、道中の旅人を惱ます騙子、天に成り代つて誅して
 呉れん」と、すでに一刀を抜かんと柄に手を掛けた、彼の男は
 驚きもせず、「イヤ旦那さま、御立腹は御道理でございませぬ、
 貴方を欺き、未だ改心を致しませねば、何んの此處で姿を見せ
 ませう、其のお金子は、チャンと此處に持つて居ります、イヤ、
 今では騙子仲間、須走の菊造と尊敬られて居りますが、何程
 須走でも、曲つた道を走つて居れば、何日かは打つ倒れる時
 あらうと、倒れない中に心を改まして、堅氣な者になりまして

ございませぬ、其れども、イヤ成らん、斬り捨てるど仰しやれば
 仕方がございませぬ、今まで働きました悪事の報ひ、何卒かス
 ッバリとお殺なして下さいます、安太「ム、ウ、すりや、何にか、
 昨夜我が目が床の間に注いだので考附たのじやナ、イヤ不憫な
 れども、汝の命を貰ひ受けた、覺悟を致せ、菊造はい、其れでは是
 れ丈お説をしてもお聞入れが無くば、詮方がございませぬ、何卒
 かお斬なすつて……安太「ム、宜い覺悟じや、此の世に云ひ残
 しは無いか……」菊造「ハイ、云ひ残しはございませぬ、安太「念
 と唱へよ、菊造「お念佛を申ししたとて、佛さまがお聞入れにはなり
 ますまい、首と胴どが離れたら、地獄へ飛走る私し、閻魔王や
 鬼に責られるのが、私しの望み……」何卒ぞ私しの首は此の松の
 枝えでも晒して下されませ、安太「ヨシ、然らば今斬るぞ」と、ス
 ラリと一刀を引抜き、彼れの色目の前へ突き附けた、通常の者で
 したら、最う慄ひ上つて顔の色も死人色となるのですが、覺悟

の前、親指と人差指とを、丸い形にして、錢を出せと云はぬ
 ばかりにしては、チャリン／＼と鑄の音をさせて居る、例の武
 士の顔を見て須走の菊造はクツ／＼と笑ひ出した、頻に安太郎
 の袂を引いて居る安太「何んじや菊造、グウ／＼袂を引て菊造、且
 那、貴方彼の武士は本者と思つて居られますか、安太「ハ、ハ、
 本者も、偽者も、彼れは立派な武士じやないか、菊造「ハ、ハ、
 旦那、眉毛に唾氣をお附けなさい、彼れは私等と同仲間、騙子
 で、五郎々々銀次と云ふ野郎でございます、安太「エ、ツ、すりや
 矢張彼れもお前の同類か……菊造「旦那さま、同類とは酷いじや
 ありませんか、伴や、今じや、貴方の家來ですのに、安太「イヤ左
 様で有つたナ、併し太刀を土足に掛けたと云ふのは、誠であらう
 か、菊造「何あに、嘘でさア、自分で小使が無くなるぞ、彼んな狂
 言を演るんです、安太「フン、悪い奴じや、然らば金子に仕やうと
 云ふのだナ、成程其れで相分つた、何んだか先刻から彼れの手

附が怪可いと思つて居た、イヤ宜しく、乃公が彼の男を助け
 て遣らうと、群集を押分て、例の武士の前へ出た安太「イヤ
 其れなる武士、町人如きを掴まへて何んとなさるぞ、武士「何にッ
 見れば未だ年若き奴、汝等の出る場所じやない、引つ込んで居
 れッ、安太「何んだッ、下から出れば附け上る騙子……武士「何にッ
 武士を掴まへて騙子とは言語道斷な奴……安太「姦ましいワイ五
 郎銀、イヤサ、騙子の五郎々々銀次とは誰の事じや、能く武士と
 成り済ましたな……銀次「汝ッ、今、堪らん、五郎々々銀次
 安太郎「目掛けて斬り込んで来た安太「無禮を致すナ」と、云ふよ
 り早く、其の手をグツと逆振上た銀次「ア、痛え、酷い事
 をしやがる此の野郎、腕が折れて了うじや、ネエか、安太「具圖々々
 云ふな、今に大井川の水を呑まして遣かはす、銀次「何を吐かし
 やがるんだい」と、藻掻奴を安太郎、肩に引摺いで、ドシ、
 と行く、町人体の男は其の隙に左様ならと逃げ出した、大勢の

群集は其の後方を附いて行く。〇何うです、彼の武士は人は若
 いが中々腕節の利た者ですナ。□左うです、其れに引き替へ彼
 の武士、何うやら騙子らしいですな、其んな事が明つて居たら
 皆寄つて撲り殺して遣るのに……△併かし大井川へ此の頃に
 投り込まれては堪つた者ぢやありませんせ、此奴は見者じや
 と、ガヤ／＼と話合乍ら尾いて行く、須走の菊造も尾いと行く
 渡し場へ來ると、恰度今舟が出掛ける處、曲者を擴いだまゝで
 安太郎は乗り込む、須走も乗り込む、偶と須走の顔を見たまゝで
 安太郎の家來に成つて居るとは知らないから、頻りに目で助け
 て呉れと頼で居る、須走菊造は知不顔、半兵衛、須走ナア旦那、
 最と中央から投込んで遣りなさい安太其うじや、川の中央へ舟
 が行つてから投込んで遣のじや、斯奴を聞いた五郎々々銀次は
 泣き出した銀次ワ、ワ、ワ、哥兄、須走の兄哥、助けても呉れず
 悪突込みをするなんテ、先日の借金子は拂うから、助けて呉れ

第九席

……ワ、ワ、須走、イヤコラ兄哥て何んだい、憚り乍らボン／＼
 乍ら、今じや此のお武士の家來じや、外聞の悪い……、兄哥な
 んて云ふて呉れるな、銀次の野郎愈々泣き面に蜂でございます
 仕方がない銀次アワ、お助け……、お武士様、斯奴も私と
 同じ騙……、須走、エイ吐すな……、ど、引擔がれて居る銀次の
 横面を一ツ、ボカリ、拍子の好い旨まく願がはすれて、只「フ
 ワ／＼ワ、」と云ふのみ、後は言ふ事が出来ぬ様になつた
 サア是れから愈々舟が大井川の中央へ出て参りますと、川の
 中へ投込むと云ふ、至極面白のお話でございませすが例の次席に
 詳しく……。

舟は追々ど川の中央へ出て参ります此處で宜からうと安太郎は

立ち上り安太「サア五郎々々銀次、大井川の水は又格別の味じや
 と聞及ぶ、何程でも欲丈香が宜い……銀次「ワ、ハ、フガ
 矢聲と見えまして、川中へドアン——銀次は少く泳ぎを知つて居る
 者と見えまして、浮きつ沈みつ、岸の方を指して泳ぎ行く、乗
 り合ひはドツと聲を上て笑らひ出した、岸に立つて居た大勢の
 見物は「其れツ、今に此岸へ泳ぎ附くぞツ、來たら撲れ、
 此んな時は撲り徳じや……」と、手に手に木片を携さへて待
 て居る、或ひは小石をなげるやら、左右する中に岸へ着いた、
 サア打てと云ふので寄つて集つて打ち撲る、此方は安太郎、舟が
 向ふへ着くとドシ——と路を急ぎました、岡部まで参ります
 ると日が暮れ掛つた安太「何うじや須走、此處らで宿を取らうか
 ……須走「可「否「ません、岡部の宿は伴は鬼門ですから……
 安太「ハ、ア、何故鬼門じや須走、三年程前に此の岡部で、仕事を

仕損なつて骨酷い目に逢ふした安太「ハ、ハ、ハ、矢張騙子でかい
 ……須走「へイ、其れから此方と云ふ者は岡部の宿へは成丈這入
 らぬ様に居ます安太「フム左様か、じや仕方が無い、最う一
 ツ向うで宿を取らう、併かし夜道じや行かれまい……須走「ナ
 ニ、大丈夫です、夜道も面白いです安太「其れでは行かう
 と、岡部をはなれました安太「須走、淋いな……須走「旦那、大丈夫です
 と暮れ果てました安太「須走、淋いな……先程岡部の宿を出る時
 か……安太「何んだ、何んだ、何んだ、何んだ、何んだ、何んだ、
 はお前が大丈夫と云つたじやないか、須走「ケド、之れ程淋いとは
 思ひませなんだ……何だかコ、氣の後方からタ、誰かが着い
 て來る様に思ひま……安太「ハ、ハ、ハ、氣の弱い男じやな、何ん
 だ、慄え聲を出して、須走「ナ、ニ、誰か、誰か、誰か、誰か、
 動丈です、安太「ハ、ハ、ハ、負惜みの強い奴じやな」と、云つて
 闇をもちどはすドシ——と歩いて居る須走「ナ、旦那、此處らが

何うも追はぎの出さうな處ですナ安太ハハハ、出るか出ないかは知らぬが、乃公の後方に一人驅子が居るのじや、ハハハ、須走申談じや御坐いませんせ……」と尙も歩いて居ると、突然須走「ヒヤ——、ア、出た……、オ、お化が……安太何んじや須走、屹驚するじやないか……、大きな聲を出して乃公の手を握つて、何うしたのじや須走ハ——驚かしやがった、畜生ッ、笥棒奴ッ、人を馬鹿にしやがる……、ハハハ、旦那、犬の奴郎が飛んでも無エ、ハハ、笑はしやがる……安太何んじやい、犬で驚いて居たのか……、ハハハ、須走モ一旦那到底もじやございませんが可否ません、何處此處らに宿は有りますまゐるか……、南無阿彌陀佛……安太氣味の悪い聲を出すナ」と、偶と向ふを見るに大きな百姓家らしいのが、闇の中に星光りで見える安太「ナ、須走、何うやら彼方に百姓家が有る様じや、彼方へでも參つて頼んで見ようじやないか須走「ハイ、其りやもう其奴が

一番勝です……安太「其れでは其う致さう」と、道を横え這入つて其の家の表へ來ると、須走は「ハイ、一寸お頼みがございませ」と、戸をトン／＼と叩くと、内部では、未だ夜の口ですから寢て居ない者と見えまして「何方ですがすかい、用なら明日に仕てお呉んせい須走「イヤ、私等は旅の者でございまして、宿を取り夫ないまして、實に困つて居ります者ですから、何うか庭でもかまひませんで、何うぞ今夜一晩だけ、お泊の程を願ひます」○「イヤ宅は宿屋じやないからな、泊る事は出来ませんよ須走「そりや前から知つての頼み、後生ですから一晩だけ……」○「イケませんで、宅は皆寢て居るし、奥も一杯じや、他家へ行つて頼なさい須走「其れが他家に家が有れば他家へ行くのですが何分にも勝手が明らかで者ですから……」○「諄い人じやナ、可

白切れやアがつて、人が是れだけ下から出てゐるのに附け上り

誰れだつと思つて遣がるツ、之ん蓄生ッ、須走の菊造様を知らねエかッ。〇「何んじや、須走の菊造だッ、ネッから其んな名前は聞いた事はねエナ。須走、イヤ〜、しい野郎だナ、戸は締つて居るし……」と、須走は地輪太踏んで居る、安太郎は安太、コレ須走、捨て居け〜、須走でも旦那、忌敷じや有りませんか安太、イヤ〜、捨て置け〜、また他に家も有らう……、此處へ来い」

と、須走の手を取つて引つ張る様にする須走旦那、伴は残念でなりませんが、安太、ア、宜い、捨て置け、萬物の靈長たる人間でありながら、情を知らぬ様な奴は録な者じや無い、勘忍して置け」と、漸う安太郎は須走を連れだして、またも彼方此方と歩いて見たが見當らない、偶と前を見ると、穢多辻堂らしき者が見える、安太、須走、須走、へい、安太、コリヤ辻堂じやな、須走、へい、辻堂らしうございますな……、安太、何うじや、此夜は辻堂で一泊致さうかナ、須走、へい、辻堂じや……、安太、怖いのか、須走、ナ、ニ、怖

くは有りませんが、安太、其れじや宜いじやないか、須走、ケド旦那、何に出で来るか、心配するな、安太郎が附て居るはい……、ハ、何に出る者か、心配するな、安太郎が附て居るはい……、ハ、何、須走、其りや貴方がお在でなら大丈夫です、安太、其れでは、此處に定めやう」と、安太郎は辻堂の前に來たり、兩手を合し、安太、何様かは存じませんが、我々主従は宿を取り失なひ、難儀致す者でございます、何卒此一夜の宿を貸し給へ」と、禮拜を致し、扉をギ〜と開いて、安太、須走、早やく中へ這入れ、須走、何う致しまして、旦那様から……、安太、氣の弱い奴じやナ、其れでは、乃公が前に這入つて遣らう」と、中へ這入りますと、燈明の油が絶て、今正に消んとするところ、安太、早く這入らぬか、外に居るより余程勝じや、須走、大丈夫でせうな……」と、漸うと辻堂の中へ這入つた、須走、ホンニ此處は外よりは暖いですな、安太、左様じや、扉も閉て居こう」と、ギ〜と、以前の如くに閉て

主従二人は、辻堂の中の片隅の方で、腕を枕にして、ゴロリと横になりました。安太郎は晝間の旅の疲れで、横になると大膽にもゴウ〜と、駢を掻初める、其れに引き替須走の菊造、寝る處か怖くて仕方がない須走旦那、旦那安太、ゴウ〜 須走、ゴウ〜
 「じやありませんせ……、旦那、目を覺してお呉んなせ……」
 と、安太郎が寝かけると揺起す安太ウ、ン、何んじやい須走、須走、何うか寝ずに起きて居て下さい、頼みますワ安太お前も寝たら宜いのじや須走、其れが寝られ無いんです……、ア、ッ、到頭燈明の火が消えて了つた…… 安太、暗い方が宜いじやないか須走、申談じやございませんせ、別嬪な女どなら其りや暗いのも宜いでしやうが、何程貴方が男前だと云つても、槍の手合じや面白くは有りませんよ安太、ハ、ハ、馬鹿な事を云ふな……」
 笑ひ話を仕て居ると、夜は次第と闇渡りました、四邊は深と致しまして、時々訪れますは秋の夜風が、扉の隙からヒユ——と

這入る、今まで話合て居たが、話も盡て、安太郎はまたもグウ〜と駢を掻出した、暫くすると須走菊造が須走旦那一寸起て下さい〜、エ、旦那……」
 と、またも揺起しますから五月蠅とは思つたが安太、何んじやい…… 須走、ア、ノ話聲、其れ〜、何んだか斯う此の辻堂へ向けて走つて来る様子です…… 安太、フム、確かに人の来る様子じや、此の真夜中に走くと云ふは唯の者じや有るまい須走旦那大丈夫ですか安太、ナニツ、心配するな鬼が出ようが蛇が出やうが大丈夫だ、此の間頭から腕を使はぬ故か、夜々腕が夜泣をして困るのじや須走、イヤ其いつを聞いて安心致しました……」
 と、話し合て居る處へ、其の足音が段々くと近寄て参ります、次第に話聲までが手に取る様に聞える、耳を澄して居ると、
 □「何を、又彼の野郎は仕て居るんだらうな
 △「其うだ、ヒョツとすると、ヒョツと仕たのかも分らねエナ
 □「其りやなんの事たい、ヒョツと仕たとは……」
 △「イヤ

龜の野郎が捕まつたのじや有めエかてんだい
 左様かも知れぬエ、兎も角も此處で一過体もう
 處じやねエか □ケド龜公を捜さなきやならねエじやないかい
 一同に歸りやなくちや親分にまた叱られなきやならんせ
 れも左様だナ、チヤア此處で一過下して一吹遣うと仕やうか
 と、辻堂の横手へなんだがドシンと下した様子、内部では安太
 郎は須走の二人、眠息を殺して外の様子を探つて居る、其
 な事は、何うしやう △仕方が無エナ、夢にも知らず □併かし龜
 公、何うだえ □マア、其んな弱い役は止めとくよ △何に
 ら、何うだえ □左様ぢや無エか、乃公は龜公を捜しに行つて了
 弱、役だえ □左様ぢや無エか、乃公は龜公を捜しに行つて了
 ふは、後にはお前が只一人、葛籠の中に玉が這入つて居るは、
 四邊には人は居ねえし、コッソリお初を頂戴……
 な事を云ふな、誰がそんな事をする者かい……
 □ケドお前の

ことだから分れねエよ △じや二人一同に行かうか □葛籠を
 背負てかい △ナ、此處へ打捨つて置けやい、よ □大丈
 夫かい △大丈夫だよ」と、二人は相談を仕て、葛籠を其處へ
 置いて、以前來し方へドシンと馳けだした、此方は辻堂の中
 ホツと息を突いて須走菊造「旦那、今のは確に賊ですせ安太如
 何にも盗賊らしいナ、何うやら女を誘拐して來た様じやが、一
 ツ葛籠の中を調べて見やうか須走其奴は何うも面白いですナ
 安太若し女であつたら助けて遣らねば相成ぬ」と、そつと安太
 郎は扉を開て、星光りて四邊を見ると誰れも居ないから、辻堂
 を出て横手へ廻る、須走も附いて廻る、見ると大きな葛籠が一
 ツ置いてございます、安太郎は其の側に進み寄り安太菊造、菊造、
 ハイ安太此の葛籠の繩を解け菊造はい、合点」と、手早く其の
 葛籠の繩を解て、蓋を取つて見ると驚く可し、花の二八で二九
 からぬ、一人の娘が後手に縛られ、口には猿轡を入れてある、

郎太安の天喜歡 〇一一

頭髪は何うやら丸鬚らしいが、今は亂れて大半は崩れて居る、
聴て安太郎は其の女を助け出し、縛めを切り、猿轡を去りまし
て、何うやら氣絶を仕て辱るらしいから、背中を一ツドンと活
を入れた、ウンと息を吹返へした彼の女、安太郎なり須走の顔
をッロくど打ち眺め、女「ド、何うぞ命ばかりはお助けを願ひ
ます」ど、ガタ／＼慄へて齒の根も合はず、頻りに兩手を合せ
て、物も録に云へぬ有様安太「イヤ、我れは決して悪い
者では無いから安心を致せ、今お前を斯う／＼で助けて遣かは
したのじや女「エッ、ソ、それでは妾をお助け下さいましたの
か……、其れはお二人様、有難うございます……安太「シテお前
は何處の者じや女「ハイ、何にを隠しませう妾は此の鞠子の庄
屋の娘でお里と申します者、縁あつて同村の與五作さんの宅
へ嫁附く事と定まりまして、今夜が嫁入の當夜でございます、
ところが其の途中、悪者共が現はれまして、私しを引取らへ、

郎太安の天喜歡

此の様な葛籠の中へ押し込みましたが、其れから後は全く夢中
でございまして安太「ム、左様か、宜しく、其れではお前怖
からうが、今夜は夜が明るるまで此の辻堂の中に隠れて居れお里
ハイ、最う何の様な怖い淋い事でも、無事に助かりますれば、
之れ程嬉しいことはございませぬ安太「シテ須走、乃公は之の葛
籠の中へ這入るから、お前は以前の如くに纏縛つて呉れ、そ
して、お前も此の辻堂の中に隠れて居て、先刻の奴等が来て此
の葛籠を知らずに擔げて行つたら、お前もその後方から尾いて
來い、見附けられぬ様に致せよ須走「ハイ、シテ旦那何なさいま
す心算です安太「先方へ行つて蓋を開けたが最後、降伏はそれ
宜し、敵對を致すに置いては慶殺に致す所存じや須走「イヤ宜
しい、此奴は面白い、此んな事件が無くては須走も立つて行か
ねエ、怖い事も有りや、斯んな面白い事件もある、有難い
ワヤ旦那、早やくお這入りなさい安太「旨く以前の通りに……

須走、合点承知でさしと、安太郎を萬籠の中へ這入つて、娘お里と共に
前の如く細を掛け、辻堂の中へ這入つて、須走は娘お里と共に以
隠れて居る、サア此の萬籠を氣附かずには擔ぎ出たしませうや、
果たして此の萬籠を何處へ持つて参りませうや、此の場の結局
は如何に落着致しませうや、開はまた次席に詳して言言致しま
す、一寸一寸吹……。

第十席

夜は森々と閑渡つて参りました、先程馳け出しました二人の奴
は未だに歸つて参りません、何う仕たのであらうと思つて居る
と彼方より話合せて走せ来る様子、總て辻堂の前まで来て
處だ、お前一遍擔ぎねエ、お前を捜しに歸つたばかりで大變遅
龜公、お前一遍擔ぎねエ、お前を捜しに歸つたばかりで大變遅

れたよ、當り前だつたら今頃は味え酒の一杯も巨魁から出て
る處だ、
龜公が擔ぎ掛ける、と中の安太郎は、大膽不敵にも、余り歸り
が遅い者ですから、グウ、と駈を掻て寝て了つた、今擔がう
とした龜公、オヤッ兄弟、
せして遣たら何うだい、何んだか萬籠の中でゴウ、と唸つて居
るせ、
早やく遣りねエヨ、龜公、オツと合点、
擔いで見ると大變に重ひ龜公、重ひ野郎だナ、サア行かうと、
三人はスマ、と關の中を足早に出かけた、辻堂の中の須走菊
造、見失なつちやならないと、娘のお里には夜が明けたら宅へ
歸る様云ひ含めて、ソツと扉を開けて彼の三人の後方から、見
え隠れに尾いて來ると、意外にも意外、彼の先刻宿を借して吳
れと頼んで聞入れませなんだ、百姓家の表に三人の影は止まつ

た、ハッど驚いた須走「オヤ、この家は先程の家じや、
 ハ、ン判明、何程願んでも泊て呉れん筈じや、今晚は斯んな仕
 事が有たのか、イヤ宜し、先程の仇討じや、己おれ今に見て居れ
 何うするか」と、偶と横を見らると、天秤棒が立て掛けて有る、
 此収りは幸ひと、懐中から手拭を取つて向ふ鉢巻をなし、着物の
 端折り髷細をして、天秤棒を引提、今に内部で暴れ出したら表
 戸を叩き破して暴れ込んでやらう、力身返へつて待ち構へる、
 此方は其んな事とは知らず表の戸をトン／＼と叩いて「ヘイ
 親分、只今歸りました、お巨魁さま……」と、戸を叩くと、内
 部からは巨魁「オ、歸つたかい、大變遅いじやないか……」
 イ、龜の野郎が相失た者ですから、ツヒ遅くなりました」ギ
 ギー巨魁「サア、早く這入りねエ、イヤ御苦勞々々々」と、云
 つて居るのは是れぞ御律を荒らし廻つて居ります、女を誘拐して
 江戸の吉原かマツと遠い博多當りへ賣り飛ばして、其の金額で

身は百姓と扮しまして、子分を大勢置きまして、樂々ど世を渡つ
 て居ります、白浪鬼右衛門と云ふ奴、併し天網恢々疎にして漏
 さじの譬、今しも擔込んだる葛籠の中には、窈窕花の如き美人
 が恐ろし氣に現はれるであらうと、思ひは外れ意外にも、筋骨
 逞ましき、腕利の若武士と摺れ變つて居やうとは、神ならぬ身
 の知らう道理もなく、また斯様な悪人に神の守りの有う道理も
 ございません、臆て龜公は籠葛を擔いだま、で奥へ通りまして
 ドンと其處へ下した、此の響に中の安太郎は目を覺した安太「ウ
 ニヤ、オ、オヤツ、来たナ、何うやら来たらしい、宜しく」
 ど、葛籠の中で肥と身構へを仕て、蓋を取つたら最後の助拔討
 ちに致して呉れんと、待ち構へて居る巨魁「野郎、皆起ねエよッ」
 ど、十二三人の奴等を皆起して巨魁「表の戸を閉たかい……」
 へイ閉ました巨魁「迷だすと五月蠅からな、併し親分、此度の
 娘子は大了た者ですせ、巨魁「なんぞ一目見りや惚々して目を廻

大上段に振り被つた太刀、鬼右衛門の頭を擡げる處を拜み討ち
 に唐竹破にバラリモン、斬りては達人安太郎、太刀は古今の剛
 刀志津三郎、斬れたも、鬼右衛門の頭の絶頂から、口の邊
 りまで斬り下し、何ん條以て堪るべきや、流石の強賊白浪鬼右
 衛門、ワツと叫んだが其の儘で、ハツタリと其の場へ打倒れ
 て了ひました、四邊は血潮が飛んで唐紅、之れを眺た子分の奴
 等、皆ソソツ、巨魁を殺り居つたぞツ、殺つて了へツ」と一時に
 群がり來る奴を、右左の方にハツタリと斬り倒す、此の体眺め
 て氣の弱い奴は、斯奴は到底敵はん、今の中逃げ出さうと、
 表へ來たがなんて間が悪いんでしやう、先程巨魁が呟附で、戸
 閉を充分に致して有るから急に開ん、人を呪へば穴二ツとは此
 の事でせう、人の迷道を防いだ奴が、今では自分等の逃げ道を
 防がれたる有様、臆て戸を幹開た二三人、慌て飛ひ出した、
 此の時先程から表に有つて待ち焦れて居た須走の菊造、今しも

内部では何うやら安太郎が暴れ出した様子、外に居て氣が氣で
 無い、モテ／＼として居ると、矢庭に表の戸を開て飛び出した
 奴がある、「汝れ扱ては逃げ出しやがるな、何んの逃がして成る
 者かい、一々向腰を擲つ拂つて遣るんだ」と、引提て居る天釋
 棒で、ビユ一ツと横に拂つた、何條以て堪る可き、ギヤ／＼ツ
 と云つて打つ倒れた、續いて出て來る奴もビユ／＼、ギヤ／＼
 ツ、到頭三人の奴を叩き伏せ、内部へ飛び込んだ須走菊造は、
 繩を捜し出したものを見え、一々後手に踏ム縛り、またも天釋
 棒を引提、奥の方へ飛び來たり、安太郎と二人で殘る四五人の
 奴は皆縛り上た安太「オ、須走、何處も怪我は無いか……須走、へ
 ン、何んの此ンな野郎に傷けられて堪る者ですか、ちやんと表
 には三人の奴を踏縛つて居りますせ……安太「ホ、ウ、大した者
 じやな、併し此處は何宿だらう……須走「エ、此宿ですか、此
 處は貴方、先程宿を借て呉れるッて頼んでも借て呉れなかつた

家でき安太「エ、ッ、借ては先刻の……、ム、其れでじゃ、百
姓にしては不親切な家だと思つたのだ須走旦那、伴や斯う見エ
ても、斯ンナ時には随分間に合ませうがナ安太「ハ、ハ、ハ、先程の
慄えて居たのは何うした、ハ、ハ、ハ、犬と狐と間違つて……
須走「イエ旦那彼りや貴方慄へて居たのは、武者慄ひと云ふ者で
すよ安太「イヤ左様だらう、併し夜が明けたら此事件を代官所へ
訴へねは相成ぬ須走「承知致しました」と、夜の明けるを待ち受
ける、流石に永き秋の夜も、次第と東が白み出した、安太郎は
其處に有り合ふ白紙に、

一私儀昨夜女誘拐しを業とせる、白浪鬼右衛門を始め
子分を九人斬り捨て七人を取押へ申候間、何卒御見
分の程願上候也

月日

天下の浪人 歡喜天安太郎
同家來 須走 菊造

御代官所様

と書認めまして、夜が明るなり須走に持つて遣はしました、處
が昨夜助けて遣たお里が我が家へ歸つて此の事を申しました者を見
へ、庄屋からも代官へ訴へ出て居る處、早速と安太郎の手紙を
見て、下役人にも下知を致しまして、菊造が案内者となり現場へ
出て参りました、其處で安太郎は昨夜の事は落物なく申し立て
た、一度は七人の者を引き附れまして、安太郎主従も共に代官
まで出頭致した、前より安太郎主従に答めがあらう筈はござい
ません、のみならず、此の白浪と云ふ賊は二三年前からのお尋
ね者のことにて、代官の喜悦は一方ならず安太郎主従の手柄
の程を強く褒まして、褒賞と致しまして、扇子一對と金子一匹
を頂きました、借て代官所を立ち出ますると庄屋の馬市が是非
どもと泣き附く様に云ひますので、安太郎も其れではと云ふの
で庄屋の馬市の宅へ二三日足を止める事となりました、娘お里

の命の恩人だと云ふので鄭重な扱ひ、また與五作からもお禮に来る、日を改めてお里は與五作方へ嫁附事となりました、處が二日目の晩、最う寝やうと云ふ處へ、ヒユ——「按摩——」
 た様だから一ツ按摩をさそうと、主人馬市に云ひ附けて、今通り掛る按摩を呼ばしました按摩へイ今晚は、馬市さん、お前さん家は此の間大けえ事があつた相じやナ……馬市「ハア、其のお武士様が肩を揉で貰ひたひと云つ居らつしやるんだ……按摩「オ、其うかい、何うせ其んな豪傑てな人だから肩でも大つい者だらう……馬市「サ、此處だ按摩「ハイ旦那さま有難うございます」
 旦那安太「何んじや按摩「世の間には随分悪い奴もありませう安太「フム左様じや、随出世には悪い奴もあるナ按摩「何んと貴方私しの隣家に居ります奴でございませうが、何んだか博奕らしい奴で

すが、私しは斯う云ふ旨ですから、先日たのもしの流れ込みの金子と、私しの蓄ました金子を寄せて五兩と云ふ大金、若しも人に盗まれてはと思ひまして裏の地平太へ夜の中に埋めて置きました、處が隣家の奴めが見附け出しやがつて悉皆こと擡へやがつたんです、併し其ん事を云はうなら何の様な事を仕やがるかも知りませんで、未だに黙つて投て有りませう様な譯でございませうので、實に悪い奴でございませう、目さへ見えませうれば誰が彼んな奴等に五兩の金子を盗れて黙て居ます者か……」と、可愛想に按摩は涙を漏して居る、此處に安太郎が、一ツの妙智を案出しまして一度盗まれた五兩の金子を取り戻すと云ふ、如何なる智慧を絞り出させませうや、例に依つて一寸一吹致しまして次席に詳しく……。

第十一席

按摩の末吉が涙を流して語るを聞いた安太郎を姑の背の者は、
 ひ涙を流して居る、中にも須走の菊造は、オイ、泣出した
 須走「オイ按摩さん、其の五兩の金子を盗みやがった野郎の家は
 何處だえ、ハ、早く云つて呉んねエ、野郎を引捕へて、打ち殺
 して遣んだ」と、大變な意氣込みで其の場を立ち上つた、安太
 郎は「安太ア、斯れ須走、待て、須走待てつて旦那、可愛想じ
 や有りませんか、目が見えたら誰れが彼んな野郎に金子を盗ま
 れる者ですかつて、本意に可愛想じや有りませんか、ワ、一
 安太「斯れ何んだい、大きな聲を出して……、男が泣と云ふ事が
 有るかッ、須走と云ふて之の儘には……、エ、イ野郎の素首を引
 コ抜かにや男が立ねエ安太「マア、待てと申すに、事を荒立て

は宜しくない、拙者が宜しく計らつて遣る、マア、其處へ
 坐れ……、ナア按摩さん按摩「ハイ、安太「お前さん其の金子を
 取り返へさうと思へば、今拙者の云ふ通り歸つて行つて見なさ
 い其の金子は屹度以前の場所に埋めて有る按摩「ハイエ、其りや
 また何う云ふ呪ひでございます安太「ハ、ハ、呪ひと云ふ譯では
 無いが、是れからお前が家へ歸つて、其の隣家の家へ行つてナ
 按摩「ハイ、安太「マア始めは色々と世間話を仕て、マア私しは
 斯う云ふ目界も見えぬ盲ですから、金子を蓄ても人に盗まれる
 恐れが有ますで、裏の何處其處に金子が埋めて有るのです、處が
 今度は十五兩と云ふ大金が手許に蓄りましたので、明日は其の
 前に埋めて在る五兩と云ふ金子と合せて二十兩になりますで、
 以前の場所えまた埋める心算ですと斯う云へば宜いのじや按摩「
 ヘ、エ、唯其れ丈云つたら宜いのですか安太「フム左様じや、併
 しお前は前の五兩の件は何んにも知らぬ体に仕て置かぬと否ん

按摩「へい、其りやもう旨い事遣ります安太其れさへ云へば、明朝お前の埋めた處を捜せば出て来るに違ひないのじや按摩「へい、之りや妙ですな、ちやあいつ遣て見ませう」と、揉のも其れで止めて、早速と自分の家へ歸つて来た、隣家の様子を考えるど何うやら未だ起てるらしい、表へ来て末吉「へい今晚は、權次さん最うお寝みですかい權次「オ、末吉さんかい、まあ這入りなさい末吉「へい有難う權次「何うです此の節は、按摩も宜う儲かりますかい末吉「なかく、儲かる處か、此の節ではトンと否ません、金儲けはさせませんな權次「ハ、ハ、何時も末はんは其んな事ばかり云ふて居なさるのじや、併し末さんは宜う働らくのには感心じや、朝は早やうから晩の遅うまで、ヒ按摩「ど云ふて……、澤山残りまつしやろな末吉「イヤなかく、併しな權次さん、私には是う云ふ盲人ですからな、金子が有つても置く處が無いのに困りますのや權次「其りや左様七やな末吉「實は

權次さんじやから云ふのですが、私には、金子が蓄ると裏へ持て行つて埋めますのじや、先日も五兩埋めましたのじやが、今度は十五兩と云ふ大金を埋めやうと思ひましてな、前の五兩と合すと二十兩に成りますのじや、私は嫁しいてな、其の中に宜い癖でも有つたら其の金子でな、テナ事に願がへて居ますのじや、權次さんも頼みますで、宜いのが有つたら何うぞ……權次「イヤ宜しいども、お前の事じや、宜いのがあつたら、世話もして上やう、併し其の金子は今日埋める心算やのじや末吉「そりやお前さん明日の事じや權次「フン其うかい、俺また今晚かと思つて吃驚した末吉「何にか吃驚したのや權次「イヤ、アノ其の……、晩やと暗いかからな……、ハ、ハ、ハ、末吉「イヤアノ其の晩やと暗いて當前じやないか、俵らは何時でも眞暗じや……權次「ア、其うじやつたな、併し癖の事は心配しなさんな、俺が引き受けて上げますでな……末吉「へい、何うぞ宜ろしう頼みますせ權次「ハ

ア宜いとも末吉左様なら…… 權次「ア宜ろしいが、最と遊び……
末吉「イヤ最う寝んど明朝が大切じやでな……」と、按摩の末吉
は、教へられた通りを權次の家で演つて我家に這入り、寝間を
引いて寝て了ひました、後で權次の奴は肥と考へた「フ、ウ、
借ては按摩奴、五兩の金子は俺が取つた遣つた事を知り居らぬ
な、宜しく、明日は十五兩もまた理めつて吐したが、前の
五兩が無く成つて居りや野郎驚いて理めんかも知れん……、待
てよ、ウ、左うじや、幸ひ今日は賭場で勝た金子が有るから、
一ツ其の五兩と云ふ金子を以前の通りに……、ウン左うじや、
其うすりや後日には二十兩に成て返る、イヤ斯んな旨い事はな
い、何うやら按摩奴寝たらしい、今の中に……」と、權次の野
郎、按摩を計つたのが自分の計られて居ることも氣が附かず、ソ
ッぞ裏へ出まして、以前の場所へ金子を五兩チャンと理めて、
素知らぬ顔で自分も寝て了ひました、倍て翌朝になりまして、

摩の末吉は、朝早くから起き出でまして、安太郎が斯れ丈云へ
ば明日は五兩の金子が以前の通りに歸つて居ると云ふたもので
すから、早速と手さぐりを致し乍ら掘出すと、不思議にもコロ
リと五兩の金子が飛び出した、喜こんだの候ので、トソソ
杖を突いて庄屋の馬市の宅へ遣つて来た、トソソ「御免々々」
トソソ、余り早い者ですから、未だ皆寝て居る、漸々下女が
立ち出でまして、ガラリと戸を開けた、其の拍子に末吉、余り
嬉しい者ですから、トソソ「連打りに行つて居たから堪らな
い、下女の額へコソソ、下女「痛い——、何んだナ按摩さん、
朝つ原から人の額を叩いて、少と氣を附けなさい末吉「イヤ御免
々々、お前さんの額でありますか、道理で軟らかい戸だと思
つた、併しお武士さまはお在でいすかい下女「お在でじやがまだ
寝てござるせ末吉「其うかい、併では起なさるまで待たう」と、
ゴソソして居る中に安太郎も須走も起出まして、先洗面を遣

いまして、朝食を済めた、處へ這入つて来たのは按摩の末吉、
是れを見て安太郎は、ヨウ按摩さんかい早やうから來られたな
何うたい五兩は……末吉「へいお有難うございます、實に貴方の
呪には驚きました、貴方のお顔が一度見たうございます」と、
見えぬ目をバチ／＼させて居る安太「シテ五兩は手に入つたかい
末吉「實は旦那さま、昨夜斯れ／＼で、貴方に教へて頂いた通り
遣りまして、今朝早く起きて見ますと、貴方の仰しやつた通り
り五兩の金子は以前の通りに埋めてありました、實に驚きまし
た、一体何う云ふ譯で盗まれた五兩が以前の通りに有のです、
妙な呪ですな安太「ハ、ハ、ハ、呪と云ふ譯では無いが、其のお前
の家の隣家の奴が馬鹿者じや、つまり拙者が計略に落したのじ
や、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、末吉「へいエ、すると昨夜のはありや計略ですか
へエーン、一体何う云ふ計略です安太「お前が行つて以前に五兩
埋めて有る處へ、今度十五兩埋めると云つたろが、すると其の

男が前の五兩は自分が盗んで有から、其の五兩が無かつたなら
お前が今度の十五兩を埋めまいと思つたのじや、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、末吉「
へいエ、すると何んですか、其の前の五兩を以前の通りに埋め
て置ぬと、今度の十五兩が盗ねつて勘定で……ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
りました、イヤ飽まで悪い奴は彼の權次でございます、併し其
の權次の悪智慧の裏を搔つて云ふ貴方は豪い者ですナ、其う思
ふと、尙貴方の顔が一度見たう存じます安太「併し按摩さん、
以後は金子を埋めると云ふ事は止めにして、此家庄屋の家へで
も預けると云ふ事にするが宜い……、ナア御主人馬市「へい、
其りや左様です末吉「では馬市さん、早速ですが此の五兩を……
馬市「ハア宜いども、以後は此の庄屋へ金を預ける事に仕て
貰ひ、安太郎に厚く禮を述べて、其の日は立ち歸りました、其處
で安太郎も其う永々とは居る譯にも参りませんから、須走にも
相談を致しましていよ／＼明日出立する事となりました、さて

其の晩は家内一統は云ふ迄もございませぬ、與五作も出て参り
 ました、山海の珍味を取り寄せまして、今晚一晩で了ひじやと
 云ふので大酒宴でございませぬ、其の夜は大半は呑あかしまして
 借て翌日になりませぬ、早朝から出立の用意でございませぬ、須
 走の菊造も商人風では面白くないと云ふので、一寸下郎仕立て
 に致しまして、旅差を一本打込みまして、いよいよ出立と云ふ
 事になり、主人馬市に色々と禮を述べました、處が馬市も馬市何
 分娘お里が危なき處を助けて頂きました、恩人様、何か御禮と
 思ひました、が何分急な事でございませぬし、甚だ失禮でございま
 すが、旅をなされますれば大に金子と心得まして……」と金
 子三百兩と云ふ莫大な金子を差出した、安太郎も斯やうな物を
 貰うてはと色々断はりました、聞入れませぬので、原意を無に
 するも何んとやらと心得ました、快く其の金子を頂き、家内一
 統に別れを告げまして、茲にまたも靴子を後に東海道筋を急ぐ

事となりまして、それは宜かつたが困つたのは須走でございま
 す、何にしろ刀つて奴を差して居るから五月蠅、差し馴ん者で
 すから腰の當りが擦れて痛くて困る安太「コレ」須走、刀を右側
 に差す奴が有るか、刀は拙者の様に斯う左の方へ差す者じや
 須走「へい、其れ位の事は宜く知つて居ります安太「其れじやなせ
 左側へ差ぬのじや、不見宜じやないか須走「ケド旦那さま、腰の
 邊りが痛くつて仕方がありません安太「ハ、ハ、ハ、其れで右え差
 し替へたのか、面白事を致す奴じやな」と、談りつ笑ひつ、
 「シ」と遣て来る、恰度其の日の九ツ頃、現今の恰度正午時
 分でございませぬ、道傍の方を見ますると一寸した飯屋がござ
 います、安太郎主従は其處へ這入りまして、中食を仕て居る、
 處へ這入つて参りました三人連の若武士「亭主酒だ」
 亭主「へい」△「早く仕て呉れ、通いと錢は拂はぬぞ」亭主「
 へい、只今持つて参じます」と、三人の奴は豪い勢ひです

亭主はピク／＼しながら、其れへ酒を燗して出す、其れ鉢子の替りだ、口喧ましく云つて呑んで居る、偶と横手を見り、安太郎主従、△何うだい秋山、秋山「何んだ杉本、杉本「田舎武士も彼あして居ると一寸見られる者だな……」横手に居る山崎と云ふ奴、山崎「イヤ貴殿等何んだ彼んな者に目を附けて、彼れは眞の武士じやござちぬぞ、秋山「ナニ、山崎氏には異な事を承はる、何故彼れ等は眞の武士ぢやないと云はつしやる……」山崎「サラばでござる、御貴殿等は武士を見る時に第一に何處に目を附けめさる、二人「云はづと知れた大小刀でござる……」山崎「サア其の大小刀、彼の二郎の腰の邊りに氣が付き召さらぬか、杉本「エ、腰の……ハ、ハ、ハ、秋山氏、貴殿未だ分り申さぬか、秋山「フ、フ、フ、ハ、イヤ、山崎氏は矢張我々の兄と尊敬するだけ有りて豪い者じや、併し山崎氏、山崎「何んだ、秋山「彼れ等は何んでござらうな……」山崎「左様、武士として自分の連れたる下郎が刀の差様が間違つ

て居るのにも氣が付かぬ様な奴だから録な者じやない、杉本「では腕は……」山崎「なか／＼、腕には覺えの有るやうな奴じやない、一見して分るではござらぬか、色の白い……、一寸女は惚るか、知れないが、秋山「左様でござるナ、武士として劍術が出来なければ仕方がない、恰度繩見たな奴だナ、杉本「左様だ、蠅だ、蠅だ、安太郎の連る須走が刀を差し違つたのを見て色々悪口を構へた未、蠅だ、だ、蛆だ、聞えがしに罵つた、安太郎は其んな事はなんとも思つては居ない、が、是れを聞てアン／＼怒つたのは須走、根が癩癩持ですから堪らない、今しもスツ／＼立た菊造、前に有た土瓶を手に取るなり、向うに居る、一番兄顔をして嘔やい、て居る、山崎と云へる奴の面上目掛けて投げ附けました、サア大變……」

第十二席

今しも須走菊造が投附けました土瓶は、狙ひ違はず、山崎と云へる者の面上へ、ヒシャーッ土瓶は打ち破れるは中に有た熱い茶は顔から懐中へパツと飛んだ山崎「ワッ、ア、熱い——ッ」ど、仰向に引くり返つた、横に居た杉本「秋山「オヤッ、山崎がッ」ど、何れも一刀を手立に立ち上る、是れと見て取る須走菊造、斯んな處では喧嘩は出来ぬと、パツと表に飛び出す兩人「イヤ汝ッ、逃様とて逃す者か須走、エイゴテ——」吐かき早く出て來いッ兩人「汝ッ」ど、杉本「秋山の兩人は、山崎を助け起し、ハラリ表へ飛び出した山崎「汝ッ下素下郎、能くも拙者の面上へ沸茶を浴せたな、サア其れへ直れ眞二ッだ……」ど、山崎「源左衛門は一刀引き抜いた、續いて秋山駒次郎、杉木善四郎の兩人も

一刀を引き抜いて、今にも一時に斬り込まん勢ひ、安太郎は眠と今まで見て居たが、斯は捨て置きならぬと、同く表に飛び出て、三人の前に両手を支へ安太「アイヤ方々、暫時お待下され是れなる下郎は私の連れ居ります者……」山崎「何ッ、田舎者の分際と致して何んだ、何に意恨あつて此の拙者の面上へ沸茶を掛けた、サア——其れから聞け、兩人「其うだ、安太「イヤ御立腹は御道理なれど、先刻から拙者も聞居りました、偽武士じやの御立腹には三文の値償が無じやの了ひには蠅だの蛆だの、御貴殿方が申された、其れ故、此の下郎が立腹の餘り致した事と存じます、山崎「イヤ如何にも蠅と申した、蛆とも申した、イヤサ其れが何んと致したと申すのだ、安太「ハ、ハ、貴殿の様は無茶では困る、山崎「ナ、何にが無茶だ、先刻拙者等三人が申して居た話、其の當り前の事を申して居るのだ、左様だらう、武士たる者が、其の武士として魂ども致す可き秋水を、右に差やうな下郎を連

れて居る奴は、何うせ腕の出来る可き者では無、だから武士と
仕て劍術が出来ねば仕方が無いから、何れに御貴殿の御止
した安太、イヤ御道理でござる、五月、蠅と思ひ安太郎は、御貴殿の御
道、理でござる、五月、蠅と思ひ安太郎は、御貴殿の御
め、怒る三人の武士に類と謝まつて居る、弱身に附け込む風の
神、山崎「イヤ罷り成らぬ、武士たる者の意、苦地だ、頼みと有れば
其の、下郎を真二ツに致さねば相成ぬ、其れ共強て頼みと有れば
許して、遺はさう、併し唯では不可ん、我々三人と一本の立ち
合、に及べツ、と、如何にも憎々しく、威猛高に成て吐き鳴附け
る、何故此の三人が安太郎主従に、斯様な無情がございま
す、元より此の三人は悪い者ではございませぬ、此の興津に今出川
治郎左衛門と申しまして、佐分利流の槍術指南を致して居る先

生がございます、當年取つて五十三歳、歳にも似合ぬ頑硬な性
質でございまして、若い者にも劣らぬ位の氣性でございまし
て、顔と云つたら、一面にムシヤクシヤと、毛が生て、實に熊
君も、踏足で逃ると云ふ、髭の中から顔がチヨンモリと出て居る
と云つて宜しい位いでございます、然るに此の治郎左衛門に一
人の娘さんがございます、名をお八重さんと申しまして、當年
二十三日、未だに何方へも嫁附ずに、父の側で居ります、處
此の十日程前に、お八重さんは、自分のお共達の家に遊びに
りまして、日が暮るまで遊びました、火点す頃に歸り掛けた
お共達の父母も、「お八重さん、最う日は暮れて居るし、今夜は
私の家で御泊り、然して明朝早くお歸りなさい、夜道は女
一人では物相ですから」と、皆が止めるのも聞入れず、八重「イエ
一里も無い道ですから、大丈夫でございませぬ、またお宅で泊
頂いたら宜しいのですが、阿父さんや阿母さんが御心配遊ばし

ては成りませんから」と、云つて聞入れず、道に急いでスタ、其
 處から小一里もある我家へ歸る事となり、偶と後方に當つて、ケ
 と参りますと、丁度二三丁も来た時、最も昔の事、今日とは違
 ラ、ツと奇怪な笑ひ方が聞えた、最にも昔の事、誰一人として
 ひまして、夜に入りましますと人通りの少ない事、誰一人として
 通る者として、犬の遠吠が時々聞えるのみにて、訪る者として
 寂寥として、音する者として、自分の歩く足音と、纏う着物が
 冷たき夜風、スウ／＼と撥て音するのみでござい、淋しきは
 歩く度に、今さら乍らお八重は、ア、此の様に淋しいのな
 云はん方なく、今さら乍らお八重は、ア、此の様に淋しいのな
 ら、最つと早く歸れば好かつたに、と思ひながら足早に來る、
 處へ後方に當つて、返つて見ますと、變調な笑ひ方がするの
 と、後方の方を振り返つて見ますと、誰か、後方で笑うた様に聞
 思議な事も有る者、今確かに見ますと、誰か、後方で笑うた様に聞

……、神經かしらん」と、又もスタ、歩き掛けると、斯う何
 んだ、其の足音もピツツと止む、泥乎と後方を透して見ます
 と、向ふの方に、有ると思へば有る、無と思へば無と云ふやうな
 怪しき物影が見える八重、偕ては妾を女と思ひ、手籠にでも致さ
 うと思ふのであらう、女でこそ有れ、今出川治郎左衛門の娘なりし
 と、心では思ふて居りますが、矢張怖いのは怖い、其れから
 云ふものは、足を早めて一生懸命に歩き出したすると、其の足
 音が段々と近寄つて來た、丁度八重が自分の宅の十間程も手前ま
 で來た時、其の怪しき者が自分の真横手へ來た、お八重は今
 百人の味方を得たる心地、自分の宅は最も其處ですから、此處か
 らなれば聲を掛けても聞えるで有らうと思ひましたから、一
 何んな者か見て遣らうと、ヒョイと顔を横向て見た時、頬被り
 でもした、怪しげな男であらうと思ひの外、兩眼は爛々と光り

き、口は耳の邊りまで裂、顔は眞赤で、ムシヤクシヤと毛だら
 けの、併も身の丈七尺も有うと云ふ化物、お八重の顔を一目で
 ッ物と睨むと同時に、ズドンと、大變な音が致しまして、其の
 化物の姿はバツと消て、彼方の山へ指して、一塊まりの陰火が、
 ビユ——と飛で行く、八重はキャツと叫んで自分の宅までは無
 中で走り、ドシ、戸を叩き、内部から戸を開ると同時にバ
 ッタリと倒れ込んだ、チャ大變、家内の者の驚きは一方ならず
 戸を開けに來た門弟の者もギヤアツと一聲、倒頭其處へバツタ
 リ腰を抜かして了ひました、處へ馳來たりしました今出川治郎左
 衛門治郎コレ娘、何うした、奥や、早く出て參れ
 ……、奥さんの初枝さんは飛んで出た、見ると八重さんは倒
 れて居る、治郎左衛門と兩人で抱起した、ヤツと奥座敷へ連れ
 込みました、治郎左衛門は驚いたるものと見えました、何うやら
 氣絶致して居るらしい、餘程物に驚いたるものと見えまして、霧水

をアツと吹掛けて遣りました、脊中をドンと一つ活を入れて
 遣と、漸と正氣附いたらしい治郎コレ娘、氣を確かに持てッ
 初枝「お八重や——」治郎「ア、堀ッ、堀は居らぬか堀は」と、呼
 と、堀と云ふ男は先刻表を開に出た時に腰を抜したなりで、未
 だに宜う立たぬと見え、表で堀「ハイ、此處でございます」
 と、云つてる處へ出て來た治郎左衛門治郎コレ堀、一寸お前氣
 の毒だが、お醫者を呼んで來て呉れんか、堀「ハイ、ハイ、參
 りますが、又又抜きました治郎「ナニ、何にか抜たのじや、堀「ハ
 イ、其の……、一寸抜きましたので……」治郎「抜けたとは腰の事
 か……」堀「ハイ、耻かし乍ら……」治郎「マ、黙れッ、武士たる者
 が左様な事が有るか……」其處へ直れ、眞二つだ」と、治郎左
 衛門は腰の一刀に手を掛けた、驚いたのは堀六助「ハ、ハイ、
 タ、立ちました……」と、立ち上り、其れなり表へ飛び出した
 暫時すると、醫者と同道で歸り來たりしましたは堀六助、飄て醫

者を奥の室へ通しまして、八重の側に坐した良安「良安、フ、ン、
 ……、イヤ判りましたした治郎「如何でございませう良安、イヤ別に心
 配する程では有りません。コリヤ何にかに驚きなすつたのに違
 ひありませんナ治郎「ハイ、斯ういふでございまして」ど、今日
 お八重がお供達の宅へ参りし事から、今の先の出来事を、醫者
 の良安先生に話した、聞た良安「イヤ左様ですか、兎に角、期
 して寝して置きさへすれば宜しいです、氣さへ蒸附けば直平癒
 りますから治郎「ハイ、有難うございませう初枝「夜に入つて居りま
 すのに、何うも御苦勞様でございませう良安「何にを仰しやる、
 ……、ハイ左様なら兩人「有難うございませう、御苦勞様……」ど
 立關まで送り出した、サテ其の夜は何んの事もなく、また良安
 が彼の様に申して居たからと、氣にも致しませず寝入つて了ひ
 ました、處が翌朝になつて見ると、娘のお八重は矢張スヤ／＼
 と寝入つて居る、お八重／＼と起して見たが起ない、然るに其

の日も暮れて家内の者も寝に附た、恰も夜の丑満頃、奥坐敷に
 はお八重を寝かし、其の次の室には治郎左衛門夫婦が寝て居た
 が、今しも奥の室に當つてキヤア——と云ふ叫び聲、驚いた
 次郎の室の治郎左衛門夫婦「治郎「コレお八重ッ、何うしたッ」ど、
 飛上つた治郎左衛門「續いて初枝さんも飛起きた、治郎左衛門は
 枕邊の太刀を追究、ハッど唐紙押開き見れば別に變つた模様
 もなく、只有明の行燈に、消え残る燈灯の其れの如、病床の枕
 邊に進み寄つた治郎左衛門「コレ娘ッ、何う致した……初枝「お八
 重何うしたの……」ど、見ると、スヤ／＼とは寝て居りますか
 何うやら非常に恐夢たる如く、全身にはビツシヤリと汗を流し
 て居る様子、治郎左衛門夫婦も、斯は容易ならざる事と思ひ、
 其の夜は到頭寝づに明した、翌日の恰度四ツ時分（現今の午前
 十時）例の醫者の良安先生が遣て來た、二人は出迎へまして、
 奥の室に通した、良安先生は病人の枕邊に坐り込み、先手脈搏

を見て、斯方に向直り良安「何うです食物は……」治郎「中々、彼の晩から水一杯も呑みません有様でございます初枝「何にしる先生、此の様にスヤ／＼寝て居るばかりでございます良安「ハ、ア、別に何所が悪いと云ふ處は有りませんが……」シテ何も變つたこととはありませんかナ治郎「ハイ、別に變つた事はありませんが、……」左様です、恰度昨夕……夜中頃でした、恐しい夢でも見た様に、キヤツと叫びましたので、私ら二人は飛んで来て見ました、別々に變つた様な事もし、只身体一面に大變な汗が出たが、別々に變つた様な事もし、別々に變つた事はありません」と、云て居りました様な有様で、別に變つた事はありません」と、云ふのを昵乎と聞て居た良安先生は、兩の腕を拱て考へ込んで居りましたが、やがて良安「ナア今出川の先生、偶然すると、娘さん、妖化な物が附いて居るのかも知れませんが、治郎「エ、ッ、怪体な者とは……」良安「偶然すると、私の考へでは妖怪がお八重さんに附いたのじやないかと思ひます……」治郎「ム、ウ……」

フン、イヤ左様かも相判断ませぬ……」と、昨夕の事を考へて見ると、何うも其れらしい良安「ですから、今晩一ツ寝の番と云ふので遣て御覽遊ばせ治郎「イヤ如何にも左様、ゾハ今晩は一ツ左様致しませう」と、其處で良安は歸つて了ひました、其の日の夜に入るを待受まして、今出川治郎左衛門は、門人の中にも一寸使へる、山崎源左衛門、秋山駒次郎、杉本善四郎等を始め七八名の門弟と共に、今晩は寝の番と云ふので皆々奥座敷に集まりまして、宵の中は四方山の話に時を経うして居ましたが、次第に夜が闇るにつれ、話も次第に只切勝となり、片隅でコクリ／＼と居眠を始る秋山吾瀨氏、寝ては不可ぬ、寝ては不可ぬと云ふに吾瀨「ゴウ／＼」と、暫時の中に皆コロリ／＼と横に倒れ、の實は半居眠をして居る、暫時の中に皆コロリ／＼と横に倒れ、ゴウ／＼と駢を掻て寝て了ふ、今は治郎左衛門が只一人、夜は急歸て止薪の頂、所丙次來る一軍の風、思はず知らず治郎左衛

門も、其の陰風に誘はれて、ウツ／＼と思はぬ不覺を取た、サア愈是れから大化物の物語りから、茲に歡喜天安太郎が、此の妖怪を退治致さうと云ふ、至極面白いお話しでございりますが、

第十三席

今しも吹来りし一陣の陰風、其の風に誘はれて治郎左衛門も、寝ては不可ぬと思ひ乍ら、つひウツ／＼としたかと思ふと、キヤ一ツの柄手に掛けて、八重の叫び聲、ハツと気が附く一同、互に様子もない、柄手に掛けて、四邊を斯う見まはしたが別々に變つた前夜と同じ事、治郎左衛門は早速と娘の側へ進み寄りましたが、

毎晩々々寝の番でございませう、恰度お八重さんが床に附て五日目の事、彼の秋山と杉本、山崎等が集まりまして、斯れは到底先、生一人では不可ぬと思ひまして、出で、一ツ豪傑らしき人を索し出さうと云ふので、道中の武士と見たる喧嘩を吹掛けて腕を試す、今日しも街道筋で偶と目に附たのが、安太郎主従、是れなれば若い腕は確かな者で、見て取ら

木太刀を拵へました、安太郎も仕方なく、木の枝を一本切り取りました。木太刀を拵へ、安太郎は一本のお手合せを願ひます。山崎「サア遠慮なしに……」と、山崎はわざと大上段に被つて、敵を立腹させ、眞の腕を見よう云ふ心算、此等は安太郎、勝つても負つても同じ事である、中青眼に構へて居る、處が、山崎源左衛門、斯う木太刀を振り被つたが、眠乎と敵の様子を見る、と、隙もく、隙だらけ「オヤッ、此奴は不可んぞ」と、思ひながら、エイッ「お面一本ッ——」と来た、安太郎はヒョイと頭を右の方へ除いた、左の肩口ボカリ安太郎「参りました」と、平伏する、何んだか山崎源左衛門は調子脱れがして怪体な面をして居る、今度替つて秋山駒次郎、矢張大上段に振り被る、ヤッ、と二三の矢聲と共に、駒次郎がお面を打込む一本、今度は安太郎、ヒョイと左へ除いた、右の肩口をボカリ安太郎「お手の中道晴、見事に参りました」と、両手を支へる、是れも何んだか拍子脱

がした有様、次が杉本善四郎、矢張同こと三人は何んだか勝つとは勝たが、狐に掴まれたるやうな案排、また須走の菊造も怪体くつてならん「何故内の旦那が彼れが如きに負けるのであらう」と思つて居る、安太郎は三人の前に両手を支へて安太郎「御一同様是れで御免を被むりますが、宜しうございますか」三人は心算が外れたから、何んだか物も云へん、唯打点いて居る、安太郎は須走に呟附け、飯屋の勘定も濟せ、其處を立ち出で、スッ、と来る、須走「ナア旦那安太郎何んだ、須走何故貴方、彼んな奴に負るんです安太郎ハハハ、負て勝取れと云ふ事が有るじやないか、彼ら如きに勝つて何んの役に立ちものか、ハハハ、須走「クレド、貴方、撲られる丈でも残念です安太郎イヤ、實は須走、此間から肩が凝つてな、それであ、やつて肩口をちヨイ、と、叩かせて遣つたのだ、ハハハ、併し須走、太刀は必ず左に差して呉れよ、此んな事がある、と大いに迷惑を致すから須走「ハハハ、それじ

や旦那、肩が凝らたので……、成程、すると彼奴等は按摩術で
 すな安太「マア其んな者じゃ、ハ、ハ、ハ」と、笑ひ乍ら二三丁も
 来掛ると、遙か後方から「オ——イ、オ——イ」と、呼掛け乍
 走り來る三人、違う方なき先程の三人なり、安太郎主従は立ち
 止まつて居ると、バタ／＼と息急切て馳來たり山崎「アイヤ其れ
 なる修業の武士、先刻は思はぬ御無禮、何に包み隠さう我々
 三人は、此の興津の驛にて今出川治郎左衛門と申す佐分利流の
 槍術の指南者、門弟にございまして、實は斯う／＼斯様の
 譯、我々三人の者が師を思ふ一心から先刻の様な無禮を致した
 様な有様、後にて能々考へて見れば、我々三人が打込みしは
 口計りの定めし腕に覺えの在るお方と推し奉ります、何卒此
 上からのお願ひは、師匠の宅まで御同道が願ひ度、師匠より此
 のお詫仕て頂き、は、其の上、妖怪退治を……」と、一部仔什の物語
 聞いて歡喜天安太郎は「フム、左様云ふ事情が在たる事か、イヤ

左様であらう、其れでなくば彼の様な理不人なことは在べきも
 のではな、いや宜しい、萬物の靈長たる人間を惱ますと云ふは
 不埒な奴、イヤ拙者が鳴呼敷乍ら其の妖怪變化の正体を現はし
 呉れん、方々には御心配召るに及ばんと、立派に云ひ切つた、
 喜こんだのは三人の者、斯んな豪傑が來て呉れた上は大丈夫と
 大地に両手を支へ一同其れでは何卒ぞ我々と共に……安太「イヤ
 宜しい承知致した」と、此れから五人連れで今出川治郎左衛門
 の道場へ出掛け、三須走の菊造は其の途中、只ある宿に泊置き
 安太郎は唯一の師匠に、山崎連山杉本の三人が傳へた、治郎
 た、早速此の事を悦び、早々此室へと云ふので一室へ通した、
 左衛門も大きに喜び、早々此室へと云ふので一室へ通した、
 暫し致して治郎左衛門は、初めてお目に掛ります、私に當家の主人今出
 治郎「コレ、左衛門は、初めてお目に掛ります、私に當家の主人今出

川治郎左衛門と申し申す者、また今日は門弟共が無禮を致し
 ましたる由、何卒此の私を思ふて呉れる心からの事とて幾重に
 も御詫言致し申す程に、偏に御勘辨の程を……安太「イヤ、斯れは
 申し後れて御無禮を致しました、私に諸國を武術の修業に廻る
 者に御坐います、歡喜天安太郎と申し申す者、何卒以後は
 御見知置を願ひます、また今日御當家へ参りましたも意外の縁
 で、ハ、ハ、ハ、治郎「イヤ實に人間たる者が妖怪如きに惱まされる
 とは、赤面の至りにございます、何卒御盡力のほどを……安太
 イヤ御心配には及びませぬ、年若の拙者に、貴方が左迄にお
 みと有るからは、此の安太郎も生命を賭しても、其の妖怪變化
 の正体を見現しませう、ナアニ、御心配は御無用でございます
 治郎「イヤ其れほどのお勢いなれば大丈夫、其れでは早速と一應
 病人の居間を……安太「左様なれば一應」と、其室を立ち出でま
 して、彼の娘お八重の寝て居ります奥座敷へ通る、見ると病

床には娘の八重、瘦衰へて骨と皮、其れも道理、五日前から
 云ふものは、只スヤ／＼と寝るのみでございまして、食物は無
 論、水一滴すら吞まずでございまして、顔の色は青白く致し
 ました、髪は亂れ頬骨高く、目は凹み、實に見る影も無き有様
 氣の弱い者は一目見ても逃出相な、安太郎は暫時の間は眠娘の
 顔を覗いて居りましたが、纏て彼方に向直りまして治郎左衛門夫
 婦の話振を聞き、其れでは今晩は此の次の室で、其の妖怪の來た
 るを待つ事と定めまして、其の日の暮るを待ち侘て居ります
 中に、程なく日は暮れ果てました、矢張奥坐敷には前夜の如く
 山崎を始として七八名の門人衆がズツと居列び、今晩こそは安
 太郎殿とやらと力を合せ、美事妖怪を退治呉れんものぞ控へて
 居る、然るに夜は次第と闊渡つて参りまして、例の丑満の頃、
 宵の口の意気込みも何處へやら、皆の者は彼に依りて居眠を始
 折柄吹きたる一陣の風、ビュ——、此の風は如何なる術ありて

かや、一坐悉く眠出、次の間の安太郎も非常に眼を催して来た
 りしが、斯く有る事は以前より承知、片傍の一刀を取り上げて、
 鯉口三寸寛げて、今しも其の室を立ち出で、晝の中に居るに
 し、中庭よりメツと裏に出、前裁の雪見燈籠と南天の中央に
 身を潜め、腕乎と四邊の様子を伺がつて居ると、折柄縁側の戸
 の處に當つて眞黒な物影、ハツと驚き安太郎、飛立つ胸を押
 め、今出ては取り逃す恐れありと、尙も様子考へて居ると、
 べリッ音して雨戸を一枚はづしたかと思ふと、縁の上をバツ
 と其の怪の影は飛び上つた、今は最早安太郎も猶豫できず、南
 天の中より飛び出し、縁側近く進み寄り、坐敷に當りギヤアと
 云ふ娘の叫び聲が聞えると同時に、今の妖怪が飛出して来た、
 外へ逃げ出さんとする一刹那、斯の早く此の時運よく、戸際に
 佇み居た安太郎、斬りては歡喜天安太郎なり、
 に斬り下した、斬りては歡喜天安太郎なり、

流石の妖怪もキヤツと叫んでバツタリと其處へ打ち倒れた様子
 其れと同時にグワラ〜ツと家鳴振動が致しまして、家も轉へ
 らん計の有様でございます、此の物音に驚き目を覺した治郎左
 衛門を始首の者、追取り刀で手燭片手に出来たる安太、ヤア治郎
 左衛門殿、尾首能妖怪は討取ました、先御安心下され治郎エ、
 ツ、あの妖怪を……」と、手燭を差し出して能々見ると驚くべ
 し、身の長七尺もあらうと云ふ、全身は毛だらけの一目見ても
 身の毛が悚然計り、其の怪物が見事安太郎の爲に、腦天より腹
 の邊りまで唐竹割に成つて居る、一同はアツと計り呆氣に取ら
 れ、只々互ひに顔を見合すのみでございませぬか治郎、イヤハヤ
 に恐しき妖怪と、安太郎の腕前の程に驚き、妖怪と安太郎の面
 を見比るのみでございませぬか治郎、イヤハヤ
 る治郎左衛門殿、かゝる奴が御身の御息女を惱まして居たので
 ござる、思へば憎む可きやつではございませぬか治郎、イヤハヤ

の江戸の繁昌は大したものございます鐘一ツ賣ぬ日はなし
江戸の春、何方を見ても安太郎の目を驚かす物計しでございま
す、二ヶ月あまりも此の宿に滞在致して居ります中に計ら
も茲に安太郎に取つは只一人の兄たる、彼の芝濱の與之助に
面會を致しますると云ふ、本講談の大眼目と致しますお話し
は次席を譲りまして詳しく申し上げます……。

第十四席

借て歡喜天安太郎に須走の菊造の兩人は漸この事に江戸万年橋
の南詰に稻瀬屋彦兵衛と云ふ宿屋へ泊り込みました、毎日々
市街中を菊造を連れて見物旁々、兄與之助の在家を捜し廻つ
て居りました、茲に愈兄與之助と面會を致します緒端が出
來ましたと申しますは、頃しも大明八年、或日のことござ

いきました、恰度火燈頃、稻瀬屋の二階に有つて安太郎は須走の
菊造と差し向かひで夕飯を食て居る安太郎、須走、江戸の市街
は立派な者じや、須走左様ですな、百万石も劍菱も袖摺違ふ江
戸の土地と申しますから、剛氣な者ですよ……併し旦那、
貴方のお尋ねなされる與之助さまとやらおつしやるお方は……
安太「イヤ、左様お前の様に喧しく申すな、廣い土地じや、
何日かは知れる時もあるや、マア、氣を長く持て須走、そりや
貴方さまさへ構はなけりや、其れまでのことですが安太「マア
ア緩々と江戸中を見物して尋ねて見、居ないとあらばまた旅じ
や、ハ、ハ、ハ、併し須走、須走、ハ、安太「お前魚釣りは好きか須走
へ、ハ、眞平ですよ、陸からならまた釣りに参りまするが安太
船では嫌かい須走「ヘイ、船は直酔ますからな安太「ハ、ア酔のか
其れは不可んな須走「魚釣りの舟に乗るんでしたら、吉原へでも
行つて、女郎の願へ……安太「ハ、ハ、馬鹿な、じや仕方が無い、

今晚は拙者一人で夜釣りに参るとしよう。須走、旦那は随分お好きと見え、安太、俺は子供の時分から魚釣りは好きなのじや、須走、へーエ、安太、それでな、お前下へ降つて亭主に一ツ辨當を拵らへて呉れと云つて来て呉れぬか、須走、へーエ、安太、それから、此宅に魚釣の道具が在るか、聞いて呉れぬか、須走、へーエ、畏まりましたと、其の場を立たうとする、安太、ア、イヤ、御飯を済ましてからで宜い……須走、へーエ、俺はもう済みました、安太、其うか、其れじや一ツ頼む、須走、へーエ、と、ト、ト、と、下へ降つて行つた、暫時して上つて来て、「旦那様、云つて来ましたよ、道具もチャンと此宅に在りますよ、安太、オ、其れは結構々々、早速と出掛けよう、須走、其れじや旦那、歸りには大きいのを……」安太、ハ、ハ、ハ、大きな鯨でも釣つて来るぞ、須走、ハ、ハ、釣られぬよ、エ、エ、安太、大丈夫じや、太公望でも跳の俺じやからナ、ハ、ハ、ハ、須走、自慢の囊は犬も喰ませぬよ、安太、マア、歸りを待て居て呉れ、楽しみに……」と、

其處を立ちまして下へ降つて参りました、拵らへて呉れた辨當と釣りの道具を携えまして、アラリと宿を立ち居てました、夜舟を借、船頭も附けづ、只一人、兼て安太郎は櫓の覚えも有る事とて、自分でギイ、と漕出した、恰度隅田川の兩國橋の下に舟を止め、頻と釣りを致して居りましたが、中々能釣れる、恰も満潮と来て居るから釣れる事は夥しい、夢中になつて釣つて居る、處がだん、と夜も開て参りました、四ツ前(午後の十時前)ホツ、と潮が干て参りました、一寸今では釣れ止んで来た、一寸上へ上つて見よう、と、船を上りまして、またもギイ、と川上へ上り出た、御藏の邊まで漕上りまして、一寸竿を下して見、たが釣れない、仕方がないから、今度は一ツづつと下へ行くと、舟を向かへまして、流れに添て、ギイ、と下つて参りました、

九十六間架渡した、國と國との縁を結ぐ、兩國の橋上も、夜に入つては人影も稀でございませ、然るに橋の真下へ来た時、俄かに大勢の足音……、ハテナと安太郎、思はず上を振向けた時、矢庭に橋上より身を横様に、川中へ指して洵然と水煙りを立てた、借ては身投かど安太郎、昵乎と水面を噴て居ると安太郎の乗つたる舟の真横へホカリと浮上つた、早速と安太郎は狼臂を伸して其の浮上る警をグツと掴み、大力に任せて舟の上へ引き上ると聲在つて、〇「オイ、今誰か飛び込んだ様だせ」と、提灯を差し出して居る様子、安太郎は引上げて見ると力士らし、しい、然し片足は斬り落されて無い安太郎、今の身投者は拙者が救けた、心配するな、身柄は何うやら力士取らしいが、何にか變つた事は無か、〇「左様でございませるか、力士取と仰

しやいますと、首でも御存知じや有りませんか、安太身共は武士で、江戸の力士の顔は馴染はないぞよ」と、云ひつゝ、致しますので、橋は漕げず、橋が止まれば舟は流れもの、干潮時とて、ドン／＼と下へ流れ行く、安太郎は早速と手拭を取り出し、斬り口を堅く括り、色々と介抱を致して遣ると漸と氣が附いたらしい安太、コリヤ、氣を確に持て、〇「ハ、ハ、ハ、何方様か、は存知ませぬが、命の無え處を救けて頂きまして有難うござい、ます安太、イヤ、氣が附けば何により結構、併し之れには何か事、情が有る事であらう、稱はずば語つて聞されよ、〇「ハ、ハ、ハ、此の江戸の力士、殿峰五郎と申します者でございまして、今日、此の江戸の間違ひから、大勢を敵手に彼の兩國橋の上で喧嘩を、日土儀の間違ひから、大勢を敵手に彼の兩國橋の上で喧嘩を、初めました、何に云ふにも多勢と一人、到頭斯の通り片足を、を斬り落されました、何うぞお願ひでございませるか、私を暫く、日お置ひは下さりますまいか、安太、フム、左様云ふ譯か、イヤ宜

し、く、して其の傷口が治れば……殿「へい、云はずと知れた
 此の返報は致します心算で安太「ム、其の時、拙者も加勢を
 致して遣はさう」と、安太「郎は、此れが悪い奴とは夢にも知り
 ませんから、斯くも親切に致したものでございませぬ、愛讀諸君
 も御存知でございませうが、斯の殿の峰五郎と申します、
 随分悪る奴でございませぬ、詳しいことは前編伊達のお峰をお愛
 讀あらん事を願ひ置きます、色々と介抱する中に舟は万平橋の
 邊へ着いた安太「サア力士取、此處で上るんだぞ、殿「へい、旦那
 様、何うも御厄介を掛けまして相濟ませんが、何うか成丈人に
 顔を見られない様に、一ツ頬被りでも……安太「イヤ、宜ろしい
 衆「一寸、安太「郎は舟賃屋の所へ舟を着安太「オイ、舟屋の若い
 若「奴が一人、濟ぬが来て呉れぬか、舟が歸つたのじゃ」と、
 が、稲瀬屋「まじ目行つて来て呉れぬか若者「へい、稲瀬屋「まじ

すか……安太「オ、左様だつたの、忘れて居た、サア是れは煙草
 錢じや、取居け」と、若干を差出した、地獄の沙汰も金次第
 嫌な様に居た若者、打つて變つて猫撫聲若者「へい、旦那様
 是んな物を……安太「イヤ不用ぬと申すか……若者「中々、有難う
 頂戴致します、へい、稲瀬屋「へ参りまして何んと申しますので
 安太「稲瀬屋「へ参つて須走の菊造と云ふ者に、旦那が澤山な釣
 を致したから、戸板を一枚持取りに参れと云つて呉れば宜の
 じや若者「へい、承知致しました」と、金子と云ふ薬は能く
 効物で、トン、と彼の若者は走つて行く、此方は殿峰五郎、
 傷口の痛味が段々と増して遣た、ウン、と唸つて居る、安太「郎
 は親切に安太「氣を確て居られよ、宿へ参れば醫者を呼んで
 進めるから、今暫し我慢を致されよ、殿「ハイ、ア、有難うござ
 います、ウーン、と、云つて居る處へ何うやら須走、旦那眞實で
 い安太「オイ須走、大變じやく、早く来い須走、旦那眞實ですか

儕はまた正直に戸一枚を持って来ましたよ安太「マア一寸此舟へ参
 れ」と、舟の中へ須走を呼び込み、實は斯うく、徳云ふ譯だと
 話をした須走「フン左様ですか、其りや可愛想だ、じや其の男を
 此の戸板に乗つけるんですか安太「左様だ、須走「宜うがす、情は人
 の爲ならず安太「左様だ、廻り廻りて我が身の爲じや」ほん
 に今には安太「郎の身のためになるのだから、成丈顔を見せぬ様
 殿峰五郎を乗せまして、稲瀬屋の亭主にも、成丈顔を見せぬ様
 にして、二階へ上、夜中の事ですから、醫者も来て呉れないの
 を無理から頼みて来て貰ひ、色々と手當を致して遣る、サア其
 れからは安太「郎主従が毎日の介抱、其の甲斐あつてか、日々
 愈つて参ります、然し癒つた處で片足はごいません、恰度殿峰
 五郎を救けまして十四日目、今では峰五郎も余程癒つて参りま
 した、さて此の間は安太「郎も須走も外へは出ないで介抱致した
 のでございませうから、安太「郎は左様もないが須走は退屈で仕方

が無い須走「ナア旦那、何うでげす、今日は一度遊んで来さして
 貰つても宜しいですか安太「フン左様だつたな、峰五郎さんも大
 分治なつたらしいから、今日あたりは遊びに行つても宜いだら
 う須走「宜うがすかい、其奴は有難い安太「須走の事なら吉原へで
 も繰込まうと云ふのだらう、ハ、ハ、ハ、須走「そりや當前ですワ
 安太「マア一兩相込う須走「へエー一兩ツ、此奴は剛氣でござい
 ます、併し今晩は歸るまいな須走「聞く丈野暮でさア、儕が歸ら
 れ、併し今晩は歸るまいな須走「聞く丈野暮でさア、儕が歸ら
 たつて女郎で歸しやしませぬよ安太「ハ、ハ、ハ、またお暢氣か、
 吾手々々云はずと早やく行け須走「へイ、ハ、ハ、ハ、須走は忻然と
 万年橋の宿を立ち出ました時は七ツ時分、ブラ、と、隅田川を
 沿ひながら上へくと大川橋を西に渡り、花川戸から山の宿、
 早や告渡る暮六ツの、鐘を撞出す浅草寺を、横に眺めて猿若町
 今戸に知れぬ興之助さまと、思ふ心も三谷堀「日本堤の北風さ

むし、振れて歸れば余氣寒い」粹な文句の都々逸も、聲も吉原中之町、不夜城とは能く云つたり、年百年中チヤン／＼と、

ビン／＼と遣て居る、須走も懐中は暖から、自然と氣も浮々と、

して、先一杯引かけてと、只ある呑屋へ飛込んだ須走、一寸一本杯附けて呉んなよ、女、ハイ／＼と、早速と一寸した魚に酒を一

の一寸向うに五六人の旗本、何んだか密々と談話をして居る、

須走も聞とはなしに耳を傾けて居ると、〇「ナア、阪上氏、阪上何んだ、高田、阪上一休殿、峰五郎は何うしたんだらう」と、

殿の峰五郎と云ふ事が通入つた「伝、斯奴は何んだか面白相な話だ、殿の峰五郎と云や宅の旦那が先日救けなすつた彼の力士だ」と、尙も耳を敬て居ると、阪上「ウム、彼の兩國の一件から少しも知らぬ高田、確に誰か隅田川へ逃げしなに投り込んだがナ、阪上左様だから、拙者の思ふには彼れなりで死んで了つたんだ

らうと思ふが……、死んだとすれば時があいて宜いではござらぬか、高田、其れも左様だが、思へば可愛想な者だ、併し貴殿、芝濱の與之助の宅へ手紙は……、阪上「確に出た高田、何う書き召さつた、阪上「石黒軍次兵衛殿から伝附けられた通り……、一寸待召されよ、確か書損しを……」と、袂を索して、阪上「オ、是れだ、と、差し出す手紙を手にとつて高田は、暫時讀で居りましたが高田「すると、阪上氏、今晚だナ、阪上「如何にも左様でござる、場所も左様々々、彼の新富座の返報、今晚こそは……、マア高田氏一杯……、逃さぬ様に……、高田「イヤ有難う」と、手に持ちし書損の手紙をクル／＼と丸めて、ボイと投て、阪上の差し出す盃を受け、其の投た手紙の丸めたのが、天の與へか、神の與へか、此方で頼りと耳を敬て居る須走の菊造の足許にコロ／＼と轉がつて来た、ヤレ嬉しやと須走の菊造は、彼方の旗本に氣

附れぬ様、右の足を差し出し、其の手紙を足で拾ひ上げた、其奴
を早く懐中に挿込んだ須走の菊造、其家の勘定も手早に拂ひ
濟せ、表へ飛び出すと一目散、以前來し道をドシ〜 歸るので
あります……。

席十五席

飲屋から飛び出し須走の菊造、女郎買も何處へやら、今の話で
は今自分ら主従が親切に介抱して遣て居る、彼の殿峰五郎が何
うやら悪人らしく、また、安太郎様が毎日常索して御座る奥之助
と申される兄さんが、何うやら殿峰五郎の話に縫込んで居るら
しい、コリヤ一番此の手紙を持って一時も早く旦那さまにお知ら
せ申さねば成らぬと、弦をはなれた矢のそれならで、吉原後方
にドシ〜と足を早めた、併し、なんしろ吉原から万年橋です

昔から随分遠い、恰度万年橋の宿に歸つた頃は現今の午前三時、
へ上り、安太郎を起しました、漸と戸を叩き、中へ這入つて二階
たと語つた安太「ウンすりやなにか、其の手紙をお前が須走「ハイ
併し旦那殿に知すと逃げ出すかも知れませぬ……安太「左様
だ、須走「手紙は是れでございませう、（文面は前編に在れど茲にも再
記す）安太郎は手に取て見ると、

不動山岩造こと仔細あつて當方へ匿い居り申し候ら
ふ、かねて御所望の由承り居り候得共、今一人殿峰
五郎をも一所に存じ居り候、今一行衛相分らす
當方にはも最早なき不動山に御座候らへば御入用と
あらは來たる四月八日の夜半を期し百本杭まで御一
人にておん越し被下度、相違なくお手渡し申可候、

追而貴殿も男に候はば此の儀公儀へ訴へなごの卑怯
 は有之間敷、又御一人ならざれば、お渡申間敷候間
 こゝに書添へ要々まで如斯に御座候恐惶謹言。
 伊丹與之助様
 月日
 眠乎と眺めて居た安太郎「ム、ツ、何うやら我が兄は此の伊丹
 與之助らしいぞ、須走お前は宜い者を手に入れて呉れた、明朝
 は早々彼の殿峰五郎を奉行所へ引立てた上、兄上と面會致さね
 ば相成ぬ須走するに、何うやら是れらしいぞ、其れにしても彼の殿
 と有るからには、何うやら是れらしいぞ、其れにしても彼の殿
 峰五郎の命の恩人とも有らう此我を欺きしか、憎むべき奴じや
 兎角は奉行所に出入ば相分る事じや、併し須走、是れと云ふのも
 お前が在たためじや、過分に思ふぞ須走へイ有難うございやす
 と、色々と打合せして居る中に夜が明た下男に云ひつけまして、

駕を一挺調らへさせ、殿峰五郎を旨く欺し込み、細繩を取て雁
 字に引縛りまして駕に乗せ、須走の菊造は宿に返し置き、安
 太郎は唯一人、駕の横を護りまして、奉行太田河内守のお屋敷へ
 出て参りまして、其れ相當の届を成した、暫時して下役人が、此
 の時峰五郎は今更ながら奉行所と氣附、ハツと驚きました、安
 太郎は早詮方がございませぬ、駕夫の脊に負れて、二事三事お答へする
 白洲へ通れと有りませぬ、駕夫の脊に負れて、二事三事お答へする
 中、偶然横手を見るとき、同様な力士を連れて出て居る、眠乎と
 其の男の顔を見て居たが、何處かに見覚えの有る顔、有るも道
 理なり、安太郎に取ては、天にも地にも、腹違ひでこそあれ、
 一人しか知らない兄の與之助でございませぬ、安太郎、其方は「と
 思はず聲を上げた、此方では與之助、這入つて来た時から、何ん
 だか見覚えへの有る顔と思つて居たが、豈夫自分の弟が斯んな處

へとは思はなかつた安太「其う云ふお前さんは安太郎じやないか
 ……安太「如何にも私には安太郎、貴方は兄上様……與之意外な處
 で……安太「貴兄も御無事で……」と、聲曇らせた、先き立つも
 のは涙、早や四ツの眼には涙が一杯、嬉しさ懐しさ、暫時は言
 葉も無く、只互ひに顔を見合せて居るのみでございましたが、
 河内守は兩人の様子を見て居られたが、是れは何うやら兄弟ら
 しいと思はれたか奉行「コレ安太郎とやら、汝今日殿峰五郎なる
 者を召捕たるは、如何致してか、其の有様を申せよ」と、云は
 れて安太郎、ハツと奉行の前と云ふ事を思ひ出し、實は之れく
 斯様々々と、有りのまゝを語つた、仕細をお聞になつて太田河
 内守「ウム、すると其れに控へ居る伊丹與之助とは兄弟じやナ
 安太「如何も左様でございます、兄與之助に如何なる犯が有かは
 存じませぬども、弟安太郎の手柄の程に免じて……奉行「イヤ如
 何にも汝の手柄は天晴じや賞て遣はす、なれども與之助には、

旗方たる者を傷けたる藤がある故、永の處拂を申し附ける、併
 し弟安太郎の手柄に免じて一ヶ月の猶豫を致して取らす、有難
 く御受を致せよ兩人「ハイ、有難うございます」と、お受を致し
 てお白洲を下る、後には殿峰五郎と不動山岩造奉行「汝等兩人は
 後日改めて調ると致す」と、その日は其れで調べはお休、偕て
 此方伊丹與之助と歡喜天安太郎の兄弟、嬉しい事は何んにと
 へるに者なき有様、聽て芝濱の政五郎の宅に着いた、宅では政五
 郎を始め與之助の女房お峰、大勢の子分が待ち侘て居る、處へ
 歸つて來た與之助、實は斯うく、今日白洲の有様から當江戸
 を永のお暇となつたる事柄、また實の弟安太郎に面會致した事
 を談した、政五郎も珍客到來と大いに嬉こぶ、先政五郎を初め家
 内一統には初對面の挨拶を致しまして、偕て與之助と差向ひに
 なる、處へ酒肴が出る安太「マア何かからお話し申して宜しいやら
 ……最う逢うまでは被れ是れと思ひましたか……與之「イヤ、お

互ひじや、併し安太郎お前も無事で結構じや、大いお前の變つた其の武士姿……、兄の自分はこの姿……安太、イエ兄上、武士とて名ばかりでございませう、併し兄上には、定めし私しを毒歸の實子とお恨みでございませう、與之、イヤ、安太郎、何にも過ぎ去た事、今までの事件は何も斯も川へ流して、只夢じやつたと諦めて、彼の事はお互ひに語らぬ様にしやうではないか、安太、ハイ、云は、涙の種でございませう、與之、左様々々、兄弟二人は木の股から生れでた、親の何き者と思ふて居やう、安太、左様でございませう、是れから二人が語り出した、與之の助は彼の大阪より此の江戸へ來る道中、政五郎親分と意外な處から兄弟分に成た事、落着きなく、語る、安太郎も命の無き處を歡喜天様の御事、功命が救かり、峰作爺さんに永らくの育にあづかつた事、伊からずも峰作が意外の横死より、續いて老婆の病死、自分が

丹を後に大阪に出でて、今橋の白澤權四郎先生の道場で五年間の修業致した事から、計らずも白澤家の養子となりし事、それより兄を捜さんと東海道中の面白き話、兄弟二人は、或は腹を抱へて笑ひして、盃を重ねて居たが、與之、時に安太郎、今の話の中、其須走の菊造とやら、今日の事件に附いては、恩人じや、何處に居るのじや、矢張万年橋の宿にか、安太、ハイ、宿に居ります、與之、左様云ふ事なら、宅へ連れて來て……、と、早々子分の衆に吩咐して、万年橋の宿へ行き、須走の菊造を呼遣り、ましたが、早速と遣つて來た、サア是れから一同が打ち寛げました、大酒宴、儲て翌日から、安太郎には、與之の助がつき、須走には、子分の奴が附き、今日、浅草、明日は向島、今晩は吉原と遊び廻つて居る、右左、政五郎の中に、一月も残り少なくなつた、其處で殘り少なくなりました、政五郎の前に、江戸も是れで見了ひになるかも

知れやせん政五「フム、してお前さんの考へでは……」與之「ハイ、侍
 しも永らく伊丹の方へは歸りませぬ事とて、弟が來て居ります
 を幸はひに一所に歸らうと思つて居ります、また安太郎から聞け
 ば、彼れは大坂の思ある劍術の師匠、白澤權四郎と申される先
 生の家え養子に參る約束が出来て居ります事とて、是非此の與
 之助が伊丹へ歸つて我家を立てねばなりません様な譯でござい
 ます政五「フン、それも左様だ、併しお前が伊丹へ歸るについて
 は、彼のお峰も……」與之「そりやア貴方知れた事でございませよ
 二世は愚か三世と云ひかはした者ですもの、其の御心配は御無
 用ですよ政五「併し與之助が此の江戸に居ねど……」居るたつて
 お處拂だから仕方がねエが、政五「郎も一層の事伊丹の方へ引越
 さうかしらんで與之「ソレヤ貴方伊丹だつて大阪も控へて居ます
 し、馬鹿に仕た者じやございませんよ、貴方さへ構はなければ
 一所に行つた方が、儂だつて心残りは無くて好ですよ政五「じや

左様しやう安太「テ近日一所に……」政五「サア其處だが、最うお前
 云つても僅か三日しきや残る日は無えんだろ與之「ハイ、恰度明
 日からは三日ですよ政五「俺はまた色々な用事も有でな、免に角お
 前は先に安太郎さんとやら、後の整理も仕て置かなければならぬから
 また後れて行くから、後、お峰を連れて立つて呉れ、俺は
 な、立つた後で人に笑はれる様な事があつては生涯の面汚しだ
 からナ與之「左様ですよ、立つ鳥は後を濁さすと云ひますから、
 なにも濁らす様な事は有りやしないが政五「左様だ、鬼に角
 左様定やうと、愈茲に與之助「安太郎等と共に此の芝濱の政五
 郎も伊丹の方へ引越す事と定められた借て限日が參りましたので
 與之助「は女房のお峰を連、安太郎「須走の菊造を連れまして、
 政五「郎等は後日立つ事とて、後の事を打ち合せ、與之助「は此の
 江戸を永のお暇と相成りまして、安太郎「も前に來た時の旅とは
 相違で、今度はお暇と相成りまして、安太郎「も前に來た時の旅とは

か心嬉しくてなりせまん、東海道をまたも歸り來る、處が日に
 歩、夜に泊り、宿の枕も數重ねまして、漸々出て參りましたの
 は彼の桑名の七里の渡し、安太郎も與之の助も、最う處處まで來
 れば近日には伊丹に附く事と、大いに嬉こび、且は勇みました
 今しも一行四人、渡し船に乗り込んだ、處が、四人が乗つた船
 より二三丁ほど距てまして、行く渡し船、須走の菊造は頻りに
 安太郎の袖を引き出した安太「何んじやい須走、須走、且那、ソレ向
 ふ參ります、渡し船がございませう安太「フム如何にも有る、其れ
 が何んとした須走、彼の船の右つ側に腰掛けて居ります、ソレ兩
 掛を掛けて……安太「フン、居る、如何にも居る須走、彼奴御覽
 なさい、眞白な顔で濟てし居ませうが、處が彼奴は恐ろしい惡
 い奴ですせ安太「フン彼れが……」と、安太郎は與之の助の方
 向き安太「ナア兄さん、與之「なんじやい安太「ソレ彼の向ふへ行く船
 がありませうがナ、與之「フン有る、安太「彼の船の右つ側に腰掛

て居る兩掛を掛けた男が在りませうが……與之「フン、在る、
 ……、ムン……、彼奴何處かで見えた奴じや……、お前彼の男を
 知つて居るのか安太「拙者は別に知りませんが、此の須走が云つ
 て居りますには、彼奴は恐ろしい惡い奴ですと與之「ム、菊造
 さんとやら、お前さん彼の男を知つて居るのかい須走「ハイ、お
 耻かし乍ら、彼奴は以前私らの兄哥と尊敬して居りました、大娘
 師の富士の辰藏と申します奴でございます與之「ナニツ、富士の
 辰藏ツ、ム、左様だ、忘れもせぬ、ム、富士の辰藏か……、
 イヤ宜し」と立ち上つた、安太郎もお峰も須走も驚いた安太「兄
 上何なさいましたお峰「良夫……」と、皆立ち上る、與之「イヤ、彼
 奴には重々恨みのある奴」と、辰藏の悪行を詳に語つた、聞た
 安太郎「可哀なる者なら飽まで情を掛ける、また惡い奴と見れば
 根を絶すと云ふ氣性安太「ム、左様云ふ奴なら捨て置きは罷り
 ならぬ、船頭々々、彼の船に接近けよ、早やく、向岸へ附

第十六席

けは「禮は致すから」と云ふと、船頭は金子に在りつこうと一
 生懸命に漕出した、處が向ふの富士の辰蔵も其れと氣附いたも
 のか、船頭に伝附け、彼方は彼方で「破金の如な聲に呼
 見事に富士の辰蔵を打ち取りませうか、本編も愈後一席を以て
 了り事を告ぐるのでございます、一寸息次席に……。」

少々立腹致しました歡喜天安太郎、船の舳に勃然立ち上り、大
 音聲に安太「ヤア、其處へ行く渡し船暫時待つてッ、其れなる
 悪人富士の辰蔵ッ、暫時待つてッ」と、破金の如な聲に呼
 はつた、然るに彼方では富士の辰蔵と助の乗つて居る船の方
 命に漕いで行く、何うやら安太郎の辰蔵と助の乗つて居る船の方
 が次第に後れて行く様子、二人は焼氣と成ちて船頭に急立てる、

須走菊造も共に櫓を押ししたが不可、安太「ハイ、與之、
 殘念ながら向ふの方が早い様だ、安太「何故此方の船は後いので
 せう、ナ、與之、折角見附いた悪人を取り逃すも殘念だ、安太「兄上、與之、
 何んじや、安太「彼奴は討取ても構はぬ奴です、か、與之「オ、何んの構
 ふ者か、返つて上からお譽の言葉が掛るかも知れん、安太「イヤ、宜
 し、其んな奴でしたら討取りませう、船の中央に立つて頻に船頭
 安太「郎は昵乎、彼方の様子を見りませう、船の中、立つて頻に船頭
 に下知をして居る、安太「郎は助も掛たる聲と共に、ヒユ、ヒユと
 飛手裡劍、其れと同時、腕前、また與之の助とて、
 安太「郎は永年白澤先生に仕込で頂いた腕前、二本の手裡劍は狙
 山田先生に仕込で頂いた腕前、二本の手裡劍は狙
 ひ違わづ、云合せし如く、富士の辰蔵の眼へ、アッ、と
 立つた、雨船の客、ワッ、と叫んで仰向に打ち倒れた、此の腕前の程に
 じ、雨船の客、ワッ、と叫んで仰向に打ち倒れた、此の腕前の程に

陸、安太郎は須走に向ひ安太菊造須走ハイ安太お前氣の毒だが
 代官所まで行つて来て居れんか……、ナア兄上與之何んじや
 安太斯奴は代官所へ遣るのでございませうナ與之左様じや
 安太氣の毒だが一走り行つて来て呉れんかナ須走マア眞平ですよ
 代官所は大禁物々々々、御免蒙りますの安太ハハハ、代官所が
 何故禁物だ、妙な事を云ふな須走何故つて旦那、私が代官所を
 禁物と云ふのは……、其れ、判明て居ませうが、旦那……安太
 ハハハ、騙の件かい……須走シ、シイッ安太シイと云ふた處で
 兄上も御存知だし、兄嫁上も御存知ではないか、お前の騙……
 須走シ、ツ、云つちや不可ませんよ、マ、参りますよ〜」と
 須走は詮ない体、お峰は流石に女だけに「お峰ねエ安太郎さん、
 其様に嫌がつて居てな處なら勘忍して上げなさいよ、ねエ貴方」
 と、口を添たから、横手から與之助も「では安太郎、一寸船頭
 乘にでも一走り行つて貰はうか……安太左様ですナ、其れでも宜

敷でせう……、ア、コレ船頭船頭はい〜、何にか御用でござ
 いますか安太お前氣の毒だが、當所の代官所へ此の有り様を届
 けて来て呉れんか、お禮は後より致す程に船頭ハイ〜、宜敷
 ございます」と、一人の船頭は其の場を馳だした、程なく彼方
 より當所の代官土見佐兵衛は、馬に跨がりました、下役人を五
 六人も従がへ、ドシ〜と馳着けた、與之助に安太郎は、ツカ
 〱ツと其の前に進み寄りまして、實は斯れ〜、恁々の譯と、
 語つた、處が、豫てより此の大娘師富士の辰藏と云へる奴は、
 上のお尋ね者と成て居た者ですから、二人には何んのお答めも
 在りません、また在る筈はない、返つて代官より禮を受た、與
 之助はお峰に吩咐けまして、船頭衆には相當の禮を遣はしまし
 て、マア一行四人は其處を立出で、ドシ〜と道を急ぎました
 お峰は女であるから、駕に乘たり歩いたりして居ましたが、其
 れよりは別に變つたお話もなく、四日市、龜山、鈴鹿峠、土山

水口、石部、草津、大津、其れより、八軒家へ着船、早速と宿を取
 て、伏見より、船に乗、大坂の八軒家へ着船、早速と宿を取
 まして、與之助は、何には、兎も在れ、山田先生の宅をお訪ねせ
 ねばならぬと、與之助は、安太郎と共に、山田の道に來たりまし
 て、彌左衛門先生に面會に及び、一別以來の挨拶も済み「倍て
 先生に仕込で頂いた甲斐ありまして、父の仇を見事に討ち取り
 ました」と、厚く禮を述べ、喜兵衛爺さんは、聞と三年前に
 病死、安太郎も與之助も差障致し、喜兵衛爺さんは、聞と三年前に
 其處で、其の道場を立ち出、安太郎は、彼の與之助が初め、奉
 し、ました、北濱の岩田屋へも参り、安太郎は、白澤の道場へは、歸
 有る宿へ、伊丹へ歸り、其れから、安太郎は、白澤の道場へは、歸
 一度は、伊丹へ歸り、其れから、安太郎は、白澤の道場へは、歸
 父茂左衛門が殺され、此の大坂を立ち、與之助へ歸らうと云
 兄弟二人は、今更

ながら、涙を流しました、漸々の事に、伊丹へ附いて見ると、自
 分、の家は、影もなく、其れより、家を、一軒買ひまして、まづ、此處に
 落着いた、物の、一月もせんうちに、彼の芝濱の政五郎は、後片附
 も、致し、此處で、小さい賭場を開く事となり、安太郎に取つ
 伊丹へ到着、相談の上、父は、賭場を開く事となり、安太郎に取つ
 も、兄與之助と、彼の上、父は、賭場を開く事となり、安太郎に取つ
 ては、育て、親、彼の峰作、並に、婆さん等の墓を立派に建てる事
 と、して、大阪に歸り、是れでよしと云ふので、後は、兄に頼みまし
 一、度は、大に歸り、白澤先生の宅へ、久方振り、お糸さん
 の、嬉しさ、何んなのでございませうか、天にも地には、掛け替
 な、い、安太郎は、御事な、お顔、権四郎先生は、早速と安太郎の
 兄を、呼寄せ、安太郎は、御事な、お顔、権四郎先生は、早速と安太郎の
 ろ、が、與之助も、安太郎より、豫て聞て居る事とて、快く承諾をする、

其處で改めて夫婦の益を替す事となり、歡喜天安太郎は其の
 日より改めたため、白澤安太郎と名乗るやうになりました、與之助
 も、父の名を継ぎまして、伊丹の茂左衛門と名乗る事になりました
 て、四五年の中には立派な家も建て、また田地畑、幾多の山
 林を求めまして、以前の伊丹茂左衛門にもおとらぬ有様、其處
 へお峰の腹から生落しました男の子、自分の名其のまゝに與之
 助と附けました、サア愈々茂左衛門一家また政五郎一家
 は圓満な家庭を作りまして、永らく樂々と暮す事となりました
 安太郎も、白澤の養子となり、共々權四郎生先は隠居、
 後々安太郎が道場を引受け、門弟も年々殖えまして、三
 は四年の中は五百人ばかりの門弟となり、門弟も年々殖えまして、
 は安太郎の如き男の子でございませぬ、茲に目出度生み落しましたの
 玉の如き男の子でございませぬ、

歡喜天の安太郎 (終)

四郎夫婦の喜びは如何ばかり、初孫の事とて可愛道理、安太郎
 お系さんの喜びも一方ちやございませぬ、また須走の菊造も長
 の道中を忠義を盡して呉れたと云ふので、永く白澤の道場に置
 のて貰ひ、同奉公人の下女のお春と云ふ者を女房に安太郎夫婦
 の媒酌でする事となり、實に目出度事と云ふに、安太郎夫婦
 た彼の殿峰五郎はお調の結果斬罪、不動山岩造は兄の仇と云
 ので稼業指止めの上、永のお江戸拂ひ、旗本紫組は斬られた者
 斬られ損、また旗本側では云はば耻辱となるから黙つて泣き寝
 入り、性は善なり、茲に二ツの花は伊丹と大阪に咲き、種を落
 しては花の番を作つたのでございませぬ、歡喜天の安太郎も、
 した、伊丹の與之助、伊達のお峰、歡喜天の安太郎も、御休
 を以つて大團圓を告る事と致します、讀者諸君へイ御休